

1960年代における家庭科教育研究 (4)

—「岩手・技術教育を語る会」の場合 —

福 原 美 江

A Study of the Theories in Homemaking Education in 1960's (4)

— In the case of "Iwate Gijutsu-Kyoiku o Katarukai" —

Yoshie FUKUHARA

I 研究方法意識と課題

II 「語る会」の結成と研究活動

1. 「語る会」の結成

2. 研究活動の概要

III 教科研究の問題意識と方法

1. 研究内容の特色

2. 教科研究の方法意識 (以上, 第1報・第75号)

IV 家庭科理論の形成と授業研究

1. 研究の出発と研究課題の明確化—第1期 (以上, 第2報・第78号)

2. 研究課題の追究—第2期

3. 授業研究の方法と研究・実践の交流—第3～4期

(以上, 第3報・第78号)

V 「語る会」における家庭科教育研究遺産

1. 理論仮説と授業研究

(1) 理論仮説の成立

(2) 理論仮説の特色

2. 家庭科教育研究の方法論的特色

(1) 実践の理論化と理論の実践化

(2) 授業の対象化

(3) 共同研究

3. むすびにかえて

(以上, 第4報・本号)

V 「語る会」における家庭科教育研究遺産

第1報から第3報までで明らかにしたように、「岩手・技術教育を語る会」は、1960年12月に第1回の研究会を開いたのち、中学校技術科と小・中学校の家庭科教育についての研究活動を精力的に継続した。本研究では、とくに家庭科教育の研究活動を中心に、当時の貴重な研究資料の紹介と分析、当事者へのインタビューなどを通して、家庭科教育研究に取り組む問題意識、研究内容、研究方法論、研究成果の交流などについて明らかにしてきた。

このような「語る会」の研究活動は、「たくさんの未解決な問題を抱えこんでいる」(『家庭科教育の計画と展開』あとがき・村田泰彦)が、一応の区切りをつけて、1966年3月に、『家庭科教育の計画と展開』(明治図書。『技術科教育の計画と展開』は1965年9月)にまとめられ刊行された。本書を刊行したのちも研究会を継続し、個々の会員は各種の研究集会に参加し、技術科と家庭科の教育研究と実践の成果を積極的に問題提起し、実践的研究を積み重ねていった^①。

また、会員の研究と実践を交流する機関紙としての『会報』は、1965年以降は、毎月1回発行の原則が崩れたが、1966年は7回、1967年は8回、1968年および1969年は各3回というよう、81号(1973年2月)まで発行されている(巻末の資料1を参照)。このように『会報』が不定期になった要因として、研究成果の出版企画にともなう原稿執筆や、各種の研究集会に参加するために、基調報告や実践記録の執筆、および討議過程の執筆などに忙殺されたことが、『会報』で指摘されている。

本稿では、「語る会」における家庭科研究活動の成果である『家庭科教育の計画と展開』が刊行されるまでの約5年間を対象とし、家庭科研究の方法論を取りあげ、それに基づく成果や教育遺産についてまとめておきたい^②。

1. 理論仮説と授業研究

「語る会」における家庭科の研究活動は、すでに述べたように、小学校の「ごはんづくり」の授業実践の検討(1961年8月)を契機に、飛躍的に充実していく。研究活動の発展過程をあとづけると、しだいに家庭科理論の構築と、それに基づいた教授プランの立案、さらにプランの実証的研究という手順で推進されていることが明らかになった。もとより発足の時点から、「語る会」としての定式化した家庭科理論を設定したわけではなく、授業実践に基づく共同的・集団的な討議過程のなかから、家庭科理論の構築とその実践化、ならびに授業実践の分析に基づく理論化という方法意識で取り組むようになった。

そこで、部分的には第3報までに言及したが、「語る会」における家庭科教育の「理論と実践」の全体像をとらえるために、両者の関連性を意識しつつ、どのような発展過程を辿ったかについて、時系列的におさえておくことにしたい。そののち、理論仮説の基本構造、その特色と授業研究の成果について記述したい。

(1) 理論仮説の成立

「語る会」における理論仮説(または構想)、および主要な授業実践を年表ふうに抽出すると、およそ以下のようになる(次ページ参照)。

「語る会」における家庭科理論の形成

1960年

12月☆技術教育を語る会・第1回研究会開催

1961年

1月☆第4回教育科学研究会岩手県集会(遠野)

- ・小笠原スモ：家庭科は「労働力の再生産にかかわる教科」であると提案
- ・「労働力の再生産ということばは、その時点、時点で意味づけされ理解され、また、誤解されながら岩手の家庭科教育に波紋をなげかけつつ現在にいたっている。」

[小笠原スモ「第13回・家庭科基調提案」1970年1月7日付]

☆第2回岩手県技術教育研究協議会

- ・助言者の村田泰彦は、生産労働と家事労働との関係、家庭科教育の考え方について図示(本研究・第1報に掲載)

[語る会『会報』19号]

☆第10次日教組全国教育研究集会(東京)：小笠原スモ、家庭科教育分科会に参加・報告。

- ・「中央試案」(日教組中央教育課程研究委員会)を提示

◎認識の系列 1)労働力の形成

- 2)労働力の形成とその再生産のしくみ
- 3)生産労働の発達と人間の全面発達

◎教育内容 1)労働と食物 2)労働と被服 3)労働と環境

[『家庭科研究課題に対する一考察』1961年1月]

5月☆第3回岩手県技術教育研究協議会(繫温泉)：小笠原スモ「家庭科教育をすすめるにあたって」を問題提起

◎家庭生活は、客観的にみたばあい労働力の肉体的・精神的= (生理的、心理的、文化的) 再生産の場である。そこでは、日々のエネルギーの短期の再生産と、人間を生み、そして育てる次の世代の再生産とが行われる。労働力の消費が行われている社会生活と労働力の生産が行われる家庭生活とは、互いに支えあい影響し合っている。労働力がどのように消費されるかは、家庭生活にひびいていく。

◎家庭科のねらい

- 1)家庭生活の意味[労働力の再生産]をしり、
- 2)家庭経営の基礎にかかわる科学的認識[社会科学、自然科学とこの両者に支えられた技術を含む]をたかめ、
- 3)家庭生活にふくまれる国民的課題の解決にたちむかう構えを培う。

[『会報』15号、1961年7月]

8月☆産業教育研究連盟主催の全国大会に参加：阿部司「語る会の基本的立場」を報告

[『会報』臨時増刊号、1961年9月]

☆語る会・第16、17回研究会：小学校の「ごはんづくり」(小笠原スモ)の実践記録の検討

- ・科学的ということが、なかなか適用しがたい部分が家庭科の教育内容には、かなり多い。

[『会報』17号]

10月☆語る会・第21回研究会：稗貫家庭科サークル(小笠原スモ)、および久慈サークル(久慈弘子)が「労働と食物」の教授プランを提案

[『会報』21号]

11月☆岩教組第14次教育研究集会(釜石・家庭科小学校部会)：村田泰彦・今後の研究課題を示唆

- ・教授・学習過程の研究

- 1)教師と教材、教材と生徒とのかかわりあいみつめながら、
- 2)なんのために(目的)、なにを(内容)、どのように(方法)を教えるかを明らかにする。
- 3)その中で技能と認識の関係をたしかめ、授業の結果、生徒の認識がどのように高められたかをとらえ、認識の発展系列や技術の系統性がなりたつかどうかをきわめていく。
- 4)このさい「試案」の考え方方にそった教授=学習計画をくんでみることも大事にしたい。

〔『会報』22号〕

1962年

1月☆第5回教育科学研究会岩手県集会（大船渡）

- ・久慈弘子：労働力の形成と再生産のしくみをめざす家庭科の本質論について問題提起

- 1)…家庭生活は、労働力の形成と再生産の場と考える。
- 2)では、家事労働をどうとらえるか。…家事労働が必要とするあれこれの技能の習得は、子どもたちの科学的な認識を発展させない、と考える。
- 3)労働力の形成と再生産の法則や論理を学び、生産労働（=労働力の使用・消費・支出・發揮と関連して、労働力の再生産のしくみにひそむ矛盾についての認識を高める教科は必要である。これを、ひとまず、家庭科とよぶことにする。）

〔『会報』26号〕

2月☆第4回岩手県技術教育研究協議会：自主編成をめざす教授=学習過程の研究

- ・久慈弘子・シンポジウムで家庭科の教科論と教材論を提案

4月☆語る会・第32回研究会：村田泰彦・家庭科研究の問題状況を提起

- ・「試案」（中央試案）を実践によって検証する方向だけでなしに、「試案」に学んで独自のプランを組んで、実践によって検証する方向もありうる。）

〔『会報』30号、1962年5月〕

5月☆稗貫家庭科サークル『家庭科教育をどう進めるか』を刊行

- ・家庭科構想の視点（1961年度）

- 1)労働力再生産のための
- 2)科学的法則を認識し（自然科学、社会科学）、
- 3)現実の再生産が、そのとおりにおこないえない家庭生活の矛盾をつかみ、
- 4)解決の方向を考える力をつける教科である。

7月☆語る会・第40回研究会：村田泰彦・いわゆる「中央試案」についての修正案を提示

（家庭科教育は）家庭生活での日々の生理的エネルギーの再生産過程の基本的な諸法則の教授を中心核に据える。

- 1)生理的エネルギーの蓄積の必要性…労働力の形成
- 2)生理的エネルギーの蓄積とその消費のしくみ…労働力再生産のしくみ

例：家庭生活と家事労働＼家事労働と生産労働

◎諸法則の選択にあたって考慮すること

- 1)人間の全面発達のための生理的、肉体的基礎の形成
- 2)自然科学、社会科学のとりこみ（科学の基本の教授）
- 3)人間労働の科学（労働の生理、労働の社会科学）

〔『会報』33号、1962年8月〕

8月☆語る会・第42回研究会：稗貫家庭科サークルの家庭科論を修正。これを「語る会」の理論仮説にする。

◎家庭科とは

- 1)家庭生活における
- 2)労働力の形成と再生産のしくみについての
- 3)基本的な法則を認識し

4) 人間の全面的発達をうながす教科

◎留意点

- 1) 家庭科教育では、労働力の形成と再生産のしくみが、教授の中核にすえられること。
- 2) 「基本的な法則」とは、労働力の形成とその再生産のしくみにかかわって、「基本的」であること。
- 3) 再生産の「しくみ」こそは、社会の発展段階や社会体制のちがいをよくしめしていること。
- 4) 全面発達を疎外するような家事労働のあれこれを教授するものではないこと。

◎教授・学習過程の仮説

第1の柱…仕事を科学的におさえる（仕事の原理や法則は、子どもたちが自分の力を伸ばすためには必要不可欠である。）

第2の柱…働く力の形成（なぜ、食べるか。食べ方）

第3の柱…家事労働への取り組み

[『会報』34号、1962年9月]

☆日教組第2回夏期教科研究集会家庭科部会：小笠原スモ「家庭科教育研究＝実践の課題」を報告
(上記の稗貫家庭科サークルの家庭科論について提案)

9月☆語る会の討議資料：「家庭科研究をすすめるために」

- ・和田典子：中教研の見解と若干の私見（1962年8月15日付）
- ・本田康夫：家庭科研究に対する私見（1962年8月15日付）
- ・外崎光廣：岩手県の家庭科構想をめぐって（1962年9月3日付）

☆第5回岩手県技術教育研究協議会：菊池凡夫「技術・家庭科の授業研究のすすめ方」（村田泰彦執筆）を報告

11月☆岩教組第15次教育研究集会（盛岡）

- ・寺林サト子（稗貫支部）：家庭科の教授・学習過程研究の方法意識と研究方法について、および衣教材の試案作成とうでカバーの実践例を報告。
- ・広田ミツ（紫波支部）：ビーカーによるごはんづくりの実践例を報告。
- ・村田泰彦：家庭科教育の諸構想（成立根拠）を紹介。また「科学の基本を教授」するための科学的知識の体系化と、その理論の実践化を提案。

☆村田泰彦：「語る会」の技術科教育および家庭科教育に対する批判の論点と反批判を公表

[『会報』36号]

1963年

1月☆第6回民教研岩手県集会（盛岡・民間教育研究団体連絡協議会及び岩手県教組の共催）

- ・実践の結果、両者（自然科学、社会科学）の間に断層のあることを確認した。
- ・自然科学と社会科学との間に、もうひとつのステップを取り入れる必要がある。
- ・来年度の課題として、家事労働が教育内容たりえないことを、教授・学習過程の研究を通して明らかにしていく。そのための実践例をもちよる。
- ・参会者の多くは、家庭科のとらえ方を、中央試案に近い「労働力の再生産にかかわる」とか「科学の基本を教授する」というような立場をとっていても、一人ひとりの意識の相違がある。

[『わたしたちの記録』文責・久慈弘子 1963年5月]

11月☆岩教組第16次教育研究集会（水沢）：稗貫支部「うでをおおう衣服」の3年間の研究過程と実践を報告 1961年度－教科書の衣教材の抽出と検討

1962年度－衣教材の教授計画試案作成

1963年度－うでをおおう構造の公開授業（花巻小、前田小）

[稗貫支部リポート『何を、どう教えるか－授業研究』]

- ・家庭生活の何が科学と結びつき、教科内容になるかについて討議

1964年

1月☆第7回民教研岩手県集会（胆沢）テーマ：1時間の授業をどう組織するか

- ・家庭科と教育分科会（助言者・村田忠三、基調提案・小笠原スモ）
- ・今までのわたしたちの実践は、どちらかというと、自然科学的認識にウエートがかかり、社会科学ということについては手うすだということを、他の批判を待つまでもなく率直に反省している。
- ・科学を教えるということで、教科としての確立をめざしているが、ややもすると、コマギレ知識になりがちな生活と遊離するという問題をはらんでいる。

[『第7回岩手民教連合同集会の記録』]

1965年

1月☆第8回民教連岩手県集会（釜石）：授業の組織化—科学をどう教えたか

- ・小笠原スモ：衣服の構造と接合を報告

9月☆村田泰彦編・技術教育を語る会著『技術科教育の計画と展開』（明治図書）を刊行

11月☆岩教組第18次教育研究集会（釜石）：村田泰彦・生活と科学の結合の視点から「家庭科教育の構想」を提示

◎教科の性格

- ①生活と科学を結びつける教科
- ②理科、保健科、社会科に対応する教科
- ・理科、保健科、社会科の教授・学習過程で身につけた学力を主体化し適用する。
- ・家庭生活現象のなかにある原理、法則を通して発見させる。

◎教科の目標

家庭生活における労働力の形成と再生産のしくみを系統的に認識させ、人間の全面発達を志向するすじみちで、家庭生活の国民的課題解決能力をあたえる。

◎教科内容

食物

- 1)子どもが食物を摂取して身体をつくりあげていくうえで必要な栄養生理学・調理科学の基本的法則・原理をとらえる能力をつける=理科的・保健科的
- 2)子どもが生活を築いていく上で必要な国民的規模での労働力再生産のしくみ（矛盾・構造・法則）を、食生活の面からとらえる能力をつける（食物史、食糧事情などを含む）=社会科的

被服

- 1)子どもが平面の布で身体をおおうときに必要な身体と被服の構造の関係・被服材料学の基本的法則・原理をとらえる能力をつける=理科的・保健科的
- 2)子どもが生活を築いていく上で必要な国民的規模での労働力再生産のしくみを、衣生活の面からとらえる能力をつける（衣服史、衣料事情などを含む）=社会科的

住居・環境

- 1)子どもが環境との相互関係において身体をつくりあげていく上で必要な環境衛生学・住居学の基本的法則・原理をとらえる能力をつける=理科的・保健科的
- 2)子どもが生活を築いていく上で必要な国民的規模での労働力再生産のしくみを、住居・環境（住生活）の面からとらえる能力をつける（住居史、住居・環境事情などを含む）=社会科的

[岩教組『岩手の教育』第18集]

1966年

3月☆村田泰彦編・技術教育を語る会著『家庭科教育の計画と展開』を刊行

- ・食物、衣服、環境づくり、家庭づくりの教授計画、およびその実践を提示

この略年表からもわかるように、「語る会」における家庭科研究は、理論と実践の関係性をつねに重視しているが、家庭科理論として固定的に、変更不可能な理論として定式化し文章化してはいない。むしろ、家庭科実践のよりどころとして、当面の仮説的理論、あるいは指針として提案している。たとえば、研究成果を集成した『家庭科教育の計画と展開』(1966年3月。以下、『計画と展開』と略記する)のなかに、「サークルによる研究・実践の過程」を叙述しているが、研究過程から「わたくしたちが、抽出出した仮説」として、以下のようにまとめている⁽³⁾。

●家庭科教育の構想(執筆者・久慈弘子)

- ・家庭生活があるから家庭科があるのだと安易に考えやすいが、わたくしたちにとって大事なことは、家庭生活のなにが科学(自然科学・社会科学)とかかわりをもち、他教科における科学の基本の教授と、家庭科におけるそれと、どのようにかかわるのかを見おとすわけにはいかない。(37ページ)
- ・ひとくちに科学の基本を教授するといつても、それをどのように教材化するかとなれば、そこでは常に子どもの認識の拡大ということが大事にされなければならない。(中略)そして、仮説→検証→仮説の再吟味の過程から、(中略)教えられたことは、科学と生活の結びつきの再吟味であった。子どもの認識をどのように発展させるかということを問題にすればするほど、(中略)授業をどう組織するかを問題にせざるを得なくなった。(38ページ)
- ・家庭科教育では、教授の中核に労働力の再生産過程の基本的な諸法則をすることによって、生活を支配し、統御できる人間を目指す必要がある。(38~39ページ)
- ・生活事実を教材にして、そこに含まれる科学の基本となっている原理や法則を実践を通して学びとらせることによって、生活を再構成させる力を育ててやりたい。(39ページ)

この構想は、家庭科教育の成立根拠、教科理論、教育内容などについて、いまなお重要な視点を提供しているので後述することにしたい。また、教育内容の枠組みとして、食物、衣服、環境づくり、家庭づくりを構想し、とくに小学校の学習計画と教材例では、以下のように構想している。なお、引用にあたっては、枠組みを統一して引用者が作成したことをおことわりしておく。

●食物学習の計画と教材例(執筆者・細川ミサオ)

考え方(ねらい)	教材	学年
労働力の形成 ・からだの熱や力をつくる ・からだをつくる ・からだの調子を整える ・からだの栄養のバランス	再生産の過程 ・家事労働のねうち ・食物のねだん(生産労働のしくみ) ・食物とくらし ・国民生活の課題	ごはんつくり じゃがいものから揚げ めだまやきつくり サラダつくり サンドイッチ
		5年
		6年

●衣服学習の計画と教材例（執筆者・小笠原スモ）

考え方（ねらい）	教 材	学年
布でからだをおおう（平面） ・おおうための接合の方法	とめる役目（ボタン・スナップ・ホックのはたらき） つくろいと丈夫なぬいかた（ミシン）	5年
布でからだをおおう（立体） ・からだを守る意味 ・からだをおおう	からだをおおう衣服（材料） からだの動きと衣服（構造）—うでカバーフクリ	6年

●環境づくりの計画と教材例（執筆者・細川ミサオ）

考え方（ねらい）	教 材	学年
衛生的なこと 社会的なこと	住まいのよごれ—そうじ 住まいの環境(1)—住まいと気温	5年
衛生的なこと 社会的なこと	汗とよごれ—せんたく 住まいと環境(2)—照明と採光 国民の環境づくり—住まいと公共施設	6年

●家庭づくりの計画と教材例（執筆者・小笠原スモ）

考え方（ねらい）	教 材	学年
くらしをみつめる	家事労働—おかあさんのしごと	5年
	家庭づくりのなかみ	6年

「語る会」の研究過程で取り組まれた教授プランはすでに紹介したが、食物、衣服、環境づくり、家庭づくりの4領域にわたっている。

ここでは、これまで紹介できなかった「環境づくり」と「家庭づくり」について考察しておきたい。

①「環境づくり」の構想と特色

前掲の「環境づくりの計画と教材例」からも分かるように、「語る会」では、教育内容の枠組みを、学習指導要領のように「すまい」ではなく、「環境づくり」の学習と構想している。また、一般的には「せんたく」は被服学習として編成するが、「語る会」では環境づくりの重要な教材として位置づけていることも大きな特色になっている。それは、「語る会」の理論仮説に即して、労働力の形成を妨げないように、人体の環境としての衣服や住まいを考えるという教材編成の視点から導きだされたものである。たとえば、環境づくりの題材である「汗とよごれ—せんたく」と「住まいと環境(1)」の教授計画と、これに該当する当時の教科書を比較してみよう。両者の学習項目は、以下のとおりである。

「語る会」の教授計画	教科書の指導計画
<p>●汗とよごれ—せんたく（6年）</p> <ol style="list-style-type: none"> 衣服のよごれ <ul style="list-style-type: none"> ・よごれの観察→上着と下着 よごれ調べ <ul style="list-style-type: none"> ・どんなものか（汗、ほこり、泥、しみなど） ・ついた箇所と量 ・どのようにしてついたか よごれの処理と実験 <ul style="list-style-type: none"> ・しみをとる実験 ・せっけん水と布の量についての実験 ・水洗いの実験 せんたくの実習 <ul style="list-style-type: none"> ・せんたく方法のたしかめ ・用具の準備　・実習の順序 ・せんたく物の始末 母のせんたくとクリーニング屋のせんたく <ul style="list-style-type: none"> ・各自の家庭のせんたくはどうなっているか ・母はどのようにせんたくしているか ・クリーニング代　・せんたくのねうち 	<p>●身なり（5年）</p> <ol style="list-style-type: none"> 日常着の着方 <ul style="list-style-type: none"> ・整った身なり 衣服のしまつ <ul style="list-style-type: none"> ・ブラッシのかけ方 ・たたみ方 ・しまい方 ボタン・スナップつけ <ul style="list-style-type: none"> ・ボタンのつけ方 ・スナップのつけ方 ほこりびのなおし方 せんたく <ul style="list-style-type: none"> ・下着の選び方 ・下着のせんたく せんざいと水・あらい方・すすぎ方・しぶり方・ほし方・しあげとあとしまつ
<p>●住まいの環境(1)—気温と住まい（5年）</p> <ol style="list-style-type: none"> 日本の気候と住まい <ul style="list-style-type: none"> ・高温多湿の夏の住まい方 ・低温乾燥の冬の住まい方 住まいの移り変わり <ul style="list-style-type: none"> ・大昔の住まい　・現代の住まい 間取りと通風 <ul style="list-style-type: none"> ・各自の家の間取り調べ　・通風とその条件 保温と換気 <ul style="list-style-type: none"> ・暖房の方法　・暖房具の保温度 ・燃料の種類による害と換気 ・住まいのまわりの保温 新しい工業用具のとり入れ <ul style="list-style-type: none"> ・暖房の移り変わり　・器具の値段 ・燃料とくらし これから住まい <ul style="list-style-type: none"> ・自由に活動できる住まい ・既成住宅やアパートの住まい ・住まいの公共施設 	<p>●健康な住まい（6年）</p> <ol style="list-style-type: none"> わたしたちのすまい <ul style="list-style-type: none"> ・居間や茶の間　・しん室　・台所 すまいの衛生 <ul style="list-style-type: none"> ・おおそうじ　・消毒と殺虫 すずしいくらし方 すまいの安全 <p>●冬のすまい（6年）</p> <ol style="list-style-type: none"> あたたかいすまい方 <ul style="list-style-type: none"> ・日光の利用　・保温のくふう　・だんぼう 空気の入れかえ 明るいへや <ul style="list-style-type: none"> ・採光のしかた　・照明
出典：語る会著『家庭科教育の計画と展開』 1966年、明治図書、55~57ページ	出典：武田一郎『小学生の家庭』5・6年 1962年度用、開隆堂

このように、「汗とよごれ」の学習では、(1)労働することによって、衣服にはどのような汚れが付着するか—よごれの実態、(2)汚れはどのように方法で取り除くか—科学的な処理の方法、(3)家事労働としてのせんたくの仕事は、だれがどのように取り組んでいるか—家事労働の価値、の3点から構成している。「住まいのよごれ」も同様な考え方で、すまいのよごれの実態、よごれの処理方法、家事労働としての掃除の価値、から構成している。また「住まいと環境」では、住まいの内部の学習に限定するのではなく、住まいの移り変わりや住まいと公共施設などの学習を組み入れ、社会科学的側面の認識を重視していることに注目したい。

このような教授・学習過程は、まず、労働力の再生産に不可欠な家事労働として、洗濯や掃除を教材にして、その事実を明らかにし、実際に子どもたちに取り組ませる直接体験を授業として組織化し、その処理の科学的方法を習得させていく。さらに、それだけではなく、その労働はだれによって支えられているか、これらの労働にかかる社会的問題などを明らかにする学習、また、個々人の住まいだけではなく、ひろく社会的な生活環境の学習までも組織化しているところに特色がある。教科書の叙述（編集内容）と比較すれば一目瞭然であるが、具体的な家事労働を素材にして、その生活事実を、自然科学と社会科学の両面からとらえさせることを、ことのほか重視していることが明白で、こんにちの家庭科における環境教育の視点⁽⁴⁾よりも優れている。

②「家庭づくり」の構想と特色

1958年版小学校学習指導要領では、「家庭」領域を新設したが、「語る会」では「家庭づくり」の学習として構想している。この学習は、単独に題材を構成する場合もあるが、食物、被服、環境などの学習のなかに分散して取り込まれることが多い。その場合の教授計画は、(1)それぞれの生活実態の把握、(2)その自然科学的原理の理解、(3)その社会科学的原理の理解、の3点から構想している。授業過程の最終段階の「社会科学的原理の理解」の学習は、たとえば炊飯や洗濯、掃除などの「家事労働の価値」の学習であり、それが「家庭づくり」にもなるという構想である。

しかし、あえて「家庭づくり」の学習を構想した根拠は、食物、被服、環境などの個別の学習を総括する学習として、総体としての「くらしをみつめる」学習内容が不可欠と考えられているからでもある。したがって、家庭づくりの学習では、(1)家事労働の実態（家事労働の担い手、生活時間）、(2)家事労働と生産労働との関係（長時間労働、低賃金労働など）、(3)生活の合理化と経済、などを主要な内容として構想している。

このことは、当時の教科書と比較するならば、その特色がいっそう明白になる。「語る会」における家事労働の教授項目と、教科書における「家庭」の学習項目を紹介しておく。

「語る会」の教授計画	教科書の指導計画
<p>●家事労働—お母さんのしごと（5年）</p> <p>1. 現在、家事労働はどんなかたちで行われているか</p> <ul style="list-style-type: none"> ・父母の生活時間しらべと比較—家族の労働力再生産の時間は誰が多く負担しているか ・母の生活時間の分類—母自身の労働力再生産、家族のための労働力再生産、職業としての労働 	<p>●家庭（5年）</p> <p>1. 家庭の人びと</p> <ul style="list-style-type: none"> ・家族の世話ををするような家庭でのしごとは、母が受けもつ ・家族の生活に必要な収入を得るしごとは、父が責任をもつ <p>2. 家族のしごと</p> <ul style="list-style-type: none"> ・母を助けて、家族みんなが家庭のしごとを

<ul style="list-style-type: none"> ・家事労働にどんなものがあるか、その意味 ・問題点一やりくりしている現実・過重な労働 <p>2. 家事労働は、生産労働とどんな関係があるか</p> <ul style="list-style-type: none"> ・お母さんの仕事とお父さんの仕事の関係 ・大事な仕事であるが、家事労働は価値をうまない（お金にならない） ・長時間労働、低賃金構造と家事労働のむすびつき ・人間らしく生きたいために 	<ul style="list-style-type: none"> 分けあってすれば、家庭生活が明るく、楽しくなる ・家庭のしごと調べ <p>3. わたしのしごと</p> <ul style="list-style-type: none"> ・わたしたちに適しているしごとを考え、分たんを決める ・家族のひとりとしての役わりを果たす (注：・は教科書の叙述を簡略化したもの。)
出典：語る会著・前掲書 60ページ	出典：武田一郎・前掲書、5年

「語る会」が「一応の区切りをつけて」公表した家庭科研究の理論仮説と教材例を整理してみると、以上のとおりであるが、これらは固定的にとらえているのではなく、修正可能な仮説として考えられていた。このような「語る会」の理論仮説は、前掲の資料（理論仮説の形成過程）からみると、1962年7月から8月に開いた「語る会」の第40～42回研究会で検討し提示した仮説とおおむね同じであり、1962年の夏には共通理解されていたといえる。

それは、1962年11月に開かれた第15次岩教組主催の教育研究集会において、助言者として参加した村田泰彦は、家庭科の成立根拠を示し、(1)自然や社会と同様に「科学」に対応した教科として位置づけたいこと、(2)家庭科は生活の「科学の基本」の教授を中心にしてこと、(3)したがって、家庭生活に役立つことを直接の目的にしないこと、などを提案し、この理論仮説に基づく授業過程を組織化し、授業によってその有効性を確かめる実証的研究を示唆していることからも窺える⁽⁵⁾。

ここで、「科学」に対応する教科と述べている背景には、家庭科の成立を家政学という学問を直接の根拠にはしないという考え方がある。「語る会」では、教科の成立根拠を文化領域に対応するものと考えられていた。

また、家庭生活に役立つことを直接の目的にしないと述べている背景には、当時の学習指導要領と、それに基づく教科書が、有効射程の短い卑俗な実用主義に基づき教材化されていたことに対する批判があった。当時の岩手の子どもたちは、家事労働については、かなりの生活体験をもっていた⁽⁶⁾。そのため、学校が家庭生活体験の再現をすることよりも、教材に含まれる原理や科学の基本を学習することこそが、生きてはたらく学力になると考えられていたからである⁽⁷⁾。

そして、このような理論仮説を採用した授業研究の結果は、第16次教育研究集会以降において報告されるようになり、いくつかの実践は、加筆修正のうえ前掲の『計画と展開』に掲載された。1965年11月に開かれた第18次岩教組教育研究集会で、村田泰彦が提案した理論仮説「家庭科教育の構想」については、『計画と展開』では直接引用していないが、この考え方は、「語る会」と岩手県教組主催の教育研究集会における研究過程から導きだされたものであり、『計画と展開』の「II. 家庭科教育の構想」「III. 家庭科教育の実践」などにも大きな影響をあたえている⁽⁸⁾。

(2) 理論仮説の特色

このような研究過程で成立した「語る会」の家庭科の理論仮説の特色は、以下のように整理

し指摘できるであろう。

第1は、すでに述べた研究過程からも分かるように、「語る会」の理論仮説の成立については、1961年1月に日教組の中央教育課程研究委員会家庭科部会が提示した、いわゆる「中央試案」の考え方へ影響を受けていることである。しかし、それを、無批判に採用したのではなく、みずからの実践に引き寄せて、その考え方の根拠や教育内容の系統性などを再検討し、そのうえで、部分的に自らの教材研究や授業過程に取り入れた実践を試みている。さらに、その研究過程で独自の教授プランを作成し、実証的研究を繰り返して取り組むという研究を積み重ねている。その結果、中央試案の理論仮説を修正し、「語る会」としての理論仮説を構想することになった⁹⁾。

第2は、家庭科教育は何を対象とするかという、教科教育としての独自の役割、いいかえれば、教科組織における家庭科の成立根拠を明示したことである。「語る会」は、家庭科は「科学に対応する教科」ととらえ、生活の科学的認識の形成を家庭科の独自性として把握し、教科の教育では、家庭生活を情緒的に心情的に、また、卑俗な実用主義でとらえるのではなく、科学の対象として把握する必要があること、そのためには、家事労働を「労働力の再生産労働」ととらえ、家事労働の意味と役割を認識することが家庭科教育の主要な認識対象として考えられていた。

衣食住という人間の生活は、主観的にはどうであれ、客観的には自分自身の労働力を形成し再生産するために営まれる。労働力の概念には、労働者として売買される労働力という意味もあるが、人が生きていくための生理的エネルギーの蓄積が必要であり、それはまた、労働によって消費されるため、さらなるエネルギーの蓄積（再生産）が不可欠である。家庭科教育では、このような家庭生活における労働力の形成とその再生産のしくみを法則的にとらえさせ、労働力の形成や再生産が順当に行われていない生活実態を明らかにする。さらにそれは、単に個人の問題として把握するのではなく、日本の国民生活における普遍的な問題であり、矛盾でもあることを理解させたいという考え方である¹⁰⁾。

したがって、家庭生活を対象としながらも、「家庭生活に必要な」知識と技能の習得を目標にするのではなく、むしろ、複雑な生活過程を教科教育の対象として整序する視点を、「労働力の形成と再生産」に求めたということである。このような視点から家庭生活を分析することによって、家庭生活を貫く法則性=生活の科学を認識することが、教科教育としての家庭科教育の独自性として考えられていた。「家庭生活のなにが科学（自然科学・社会科学）とかかわりをもち、他教科における基本の教授と、家庭科におけるそれと、どのようにかかわるのか見おとすわけにはいかない」（『計画と展開』37ページ）という考え方には、このことを意味している。

第3は、教育内容の編成視点と教材についてである。

前述の理論仮説からもわかるように、家庭生活における「労働」、いいかえれば衣食住などの具体的な家事労働を素材にはしても、家事労働に含まれる生活技能を全面的に、網羅的に教授するのではなく、前述した家庭科成立の根拠にてらして、家事労働における原理や原則を抽出し教材化している。それは、「被服、食物、すまいなどに関する初步的、基礎的な知識・技能を習得させ、日常生活に役だつようにする」（1958年版小学校学習指導要領の中心的ねらい）という、卑俗な実用主義的教科観と、技能重視の教育内容に対する「語る会」の重要な批判点でもある。したがって、教育内容は、(1)具体的で個別的な衣食住の仕事を科学的におさえる

(仕事の原理や法則をとらえる), (2)これらの仕事と働く力の形成との関係, とくに自然科学的側面をとらえる, (3)これらの仕事の価値, とくに社会科学的側面をとらえる, の3点から編成している。さらに, このような内容に対応させて, 食物, 衣服, 環境づくりおよび家庭づくりに関する教材を提示した。

このような教科研究のプロセスから分かるように, 「語る会」では, 教育内容と教材の区別を自覚し, また教育内容にふさわしい教材を見いだすという「教育内容の教材化」という方法意識に特色を見い出すことができる。

第4は, 学習者の生活技能と認識の形成に配慮していることである。授業の導入段階では, 労働力の再生産に関する主要な仕事がどのように行われているかについて, 学習者の生活実態と生活経験を引きだし, 関心をよびおこすことを重視している。たとえば, 第2報で紹介した「ごはんづくり」の実践では, 家庭における炊飯方法を子どもから引きだしているが, 岩手県内でも地域による違いがあり, 教授・学習過程を組織する場合, 研究会ではいつも議論になっていたという¹⁰。このように, 子どもが体験している地域の生活実態を重視した背景には, 究極的には自分の「生活を支配し, 統御できる」力, いいかえれば, 生活の批判・克服・再構成(創造)の力をつけることを目標にすえたからであり, 生活の社会科学的側面の学習を, ことのほか重視していることと関連している。このような考え方は, 単に個別の家庭生活の問題として矮小化するのではなく, 地域や国民的な規模の生活課題としての普遍性をもたせることに発展させていく¹¹。そのため, 家事労働の生活技能の習得を軽視したわけではなく, むしろ授業過程では, あれこれの家事労働を習得させるのではなく, 最小限の家事労働を実験的に, 科学的に認識できるような手立てを, 同時に講じていることと関連している。

2. 家庭科教育研究の方法論的特色

さて, 以上のように, 研究成果をあとづけてみると, 家庭科教育の研究方法について, いくつかの特色を引き出すことができる。以下では, 3点について指摘しておく。

(1) 実践の理論化と理論の実践化

「語る会」の発足契機にも関係するが, 家庭科教育における実践の理論化と理論の実践化という問題意識と研究方法論に, その特色がみられる。

第1報で指摘したように, 「語る会」の発足の契機は, 教育課程の改訂にともない「技術・家庭」が新設され, 教育現場では技術科および家庭科はどのような教科なのかという戸惑いと悩みを抱いた教員によって, 両教科の「現状にいくらかでも筋道をたて」(結成「趣旨」)ることを意図して結成された。しかし, 結成の時点では, 明確な研究方針を立案していたわけではない。「語る会」における「研究の基本的立場」を明示したのは1961年8月で, 翌1962年4月に, 若干の修正をして4点の「1962年度研究活動方針」が提案された(『会報』29号)。この研究活動方針は第1報でも紹介したが, 以下の考察に関係があるので再掲しておく。

- ①子どもの認識の発達や, 技能形成のすじみちと, 教育内容の系統性を, 具体的な教材や教授過程に即して研究する。
- ②技術教育や家庭科教育の独自性を, 教科の全体構造のなかであきらかにする。
- ③研究活動をすすめるにあたっては, 自己改造ないしは主体の変革をなしとげるような研

究体制づくりをめざす。

- ④地域と日本と世界の歴史的課題についての認識をたしかめながら、国民教育の創造につとめる。

これは、「語る会」が公表した唯一の研究活動方針であり、発足から15か月を経過し、約30回にわたる研究会によって、引き出されたものである。しかも、これは、1962年度から組織的に自然消滅した1973年(『会報』81号、1973年2月)まで踏襲された¹³。この活動方針の背後には、約30回の研究内容の成果に基づく、以下のような研究の問題意識と方法意識が込められている。

- (1) 学習指導要領およびそれに準拠した教科書は、生活の実態と遊離していただけではなく、子どもの認識の発達や技能形成のすじみち、いいかえれば、家庭科の教育内容の系統性が不明確であったこと。
- (2) 教科教育、とくに家庭科では、家庭生活に関する雑多な技能の習得だけでは教育価値が低いこと。教科書にみられる卑俗な実用主義的・生活改善的な教科観には限界があること。したがって、独自の教科観と教材観が必要なこと。
- (3) 教科教育として家庭科を構想するならば、他教科との教育内容の関連性と異質性などにも配慮して、家庭科独自の教育内容の系統性と、子どもの認識の形成過程を明らかにすること。
- (4) その場合、単に理論仮説を抽象的に立案するのではなく、日々の授業で実践している具体的な教材や教授・学習過程に基づいて分析した結果を反映したものであること。いいかえれば、理論の実践化を図ること。
- (5) そのためには、授業の意図(教授計画・教材解釈)、授業過程における教師と子どもの発言内容と反応の記録などを持ち寄り、具体的に分析・検討していくこと。
- (6) そのうえで、家庭科の理論仮説を引き出し、さらに、この仮説に基づく授業を組織して、授業結果を共同的に集団的に検討し、仮説の有効性を吟味し修正すること。いいかえれば、実践の理論化を図ること。
- (7) 以上のような手順によって、家庭科の授業過程を客観的にとらえ、一般化することによって、家庭科の授業理論をつくりあげること。

このような研究課題を追究するために、まず、日常の教室実践から遊離することを戒め、実際に実施している小・中学校の家庭科実践を対象に検討している。どのような考え方で授業を実施したか、教えようとする教育内容(学習目標)はなにか、教材の教育価値をどのように考えているか、どのような教授計画を立案したか、授業の実際では、子どもはどのように反応し、どのような理解をしめし、どこでつまずいたかなど、具体的な授業を対象化することによって、家庭科実践のしくみを引き出す。その結果、それを家庭科理論として一般化していくことに取り組んでいる。一方、実践から導きだした仮説的家庭科理論に基づいて、教育内容や教材価値、教授計画などを修正し、再度授業を試みることによって、家庭科理論の有効性を吟味・検討する。「語る会」では、このような問題意識で授業が繰り返されている。これが、「語る会」における実践の理論化と理論の実践化にほかならない。教科理論は、「実践の理論化」と「理論の実践化」の双方からの研究なくしては確立できないことを、実証的に明らかにしようと試みたといえる。

(2) 授業の対象化

授業の対象化にあたっては、授業過程における教師の活動や、それに対応した子どもの活動と反応の詳細な記録を必要とする。そのために、会員は、当時の先駆的な授業研究の問題意識と方法論を学びあい、「語る会」の研究活動方針にてらして、家庭科の授業研究の方法を確かめている。

「語る会」の第1期の段階では、実践者による授業過程の概略的な報告であった。第2期になると、授業過程を分析・検討するために、ひとつの教材を取り上げ、その教授プランを、共同討議を経て立案し、それに基づいた授業過程を仕組み、その結果が詳細に報告されるようになった。こうして、仮説的に構想した教材価値の有効性と問題点が検討され、その成果に基づいて授業過程を再構成しようとした。

たとえば、稗貫家庭科サークルでは、3年間にわたって「うでカバー」を素材にして、その教育内容、および教材化の視点、授業過程などについて継続研究をしている。その共同研究の過程から、実践者がどのように授業を対象化していったかを紹介しておく。その研究過程は以下のとおりである⁴⁴。

●体をおおう衣服の構造—3年間の記録

1961年—題材：うでのきもの

- ・これまで、単に縫わせていたうでカバーを、動く体をおおう衣服の構造を考えさせるために、題材を「うでのきもの」にした。
- ・動く体の一部分であるうでのきものを作る場合、大事なこととして、「動きやすい、自由に動ける、ぴちっとではなくぶかぶかでもない」カバーをつくることを考えさせた。
- ・しかし、題材名だけを変えても、切りかえのできない頭は、やはり縫わせて、はめてみる「うでカバー」という学習とあまり変わらなかった。両者のちがいが、何なのか明確につかみとつていなかったことに、あとから気づいた。

1962年—題材：うでのきもの

- ・5年から6年へと高まっていく衣服学習の系統性をふまえて、5年で学習したボタンつけや、ほころびなおしなどと「うでのきもの」との関連性を重視した。
- ・そのため、授業をする前に、「うでカバー」として提示した方がよいか、「うでのきもの」とした方がよいかをサークルで討論した。しかし、結局は体をおおう構造はどうあればよいかを理解させ、カバーを縫わせることなので、どちらでも同じことではないか。ねらいさえきちんとあっていればよいということになった。
- ・ところが、実際の授業では、子どもたちは「役立てるカバー」として考えていたため、おしつけになり、うまくいかなかった。

1963年—題材：うでおおう衣服

- ・昨年の考え方方に立ちながらも、さらに他教科との関連を大事にして、科学の基本にかかる教科ととらえた。
- ・これまでの授業研究の反省にたって、今年はまず、基本的な構造学習とカバーをつくることを、以下のように分けて考えることにした。
 - ①うでおおう衣服の構造を考える→ここではめあてを明確にして、基本になることをとらえさせる。
 - ②前にとらえた原理を確かめるために、うでカバーをつくる→動くうでをよくつかませる。
- 理科・・・動き→関節、筋肉の変化
- 算数・・・立体→展開図（平面図）

- ・うでと布の大きさを考えさせる。
- ・何を教えるかということが、授業の中で確かめられ、次第に煮詰まってきたように思われるが、ここでも社会科学面の学習の弱さを感じた。

このように、ある教材を確定していくために、まず、教科書での扱い方を検討し、今までの授業実践を研究の対象とする。その授業過程を考察し、教師の意図がどのように子どもに与えられているか、子どもの反応やつまずきを検討することによって、さらに教材化の視点を明確にし、授業の再実践をする。このような授業の対象化を、意図的に繰り返しながら、教材と教材価値、および授業過程の一般化を試みている。このような研究が、共同的・集団的に行われ、このほかの研究でも同様な方法で成果をあげている¹⁹。

したがって、「語る会」の家庭科研究は、教科書教材を「(語る会の)独自の教科内容に当てはめたもので、自主教材ではない」²⁰という指摘は誤りである。たしかに、「語る会」が構想した学習計画や教材などには、教科書教材も含まれている。しかし、家庭科教科論やその教材価値の分析、および認識対象や授業過程などのとらえ方が、指導書や教科書とは異なっている。たとえば、当時の教科書（武田一郎『小学生の家庭』1962年度版、開隆堂）では、「食事のつづだい」（題材名。以下同じ）→台ふき作り（教材。以下同じ）、「身なり」→ボタン・スナップつけ＼せんたく、「すまいの整とん」→そろばん入れ作り＼整理ぶくろ作り（以上、5年）、「衣類の整理」→上着のせんたく、「わたしたちの衣生活」→布カバー作り、「楽しいへや」→のれん・ざっし入れ・花びんしき作り（以上、6年）などになっている。「語る会」は、これらの題材と教材、ねらいと生活技能との矛盾や不整合を理論的に実践的に明らかにし、教授・学習過程における実習の位置や学習活動、生活技能を再検討することが、家庭科を教科として確立できる方法と考えていた。これは、日常の授業を対象化することによって明らかにできた成果である。

(3) 共同研究

次に、以上のような問題意識と研究方法論による家庭科理論の実証的研究は、実践者と研究者による共同研究として取り組まれていたことに注目したい。この背景には、教科研究は、単に教科書教材をつくり変えることにあるのではなく、家庭科の教科理論や教育内容、教材、および授業過程を首尾一貫して研究の対象に据えることと考えられていた。そのためには、家庭科教員一人ひとりが、家庭科研究の主体として研究方法論を身につけ、教科研究の力量を高めることが不可欠であるとされていた。ひとりの中核的な家庭科教員を輩出するのではなく、「語る会」に参加した会員一人ひとりが、共同的・集団的な研究過程に参加することによって、家庭科研究における問題の所在を確かめ、その研究方法論を習得すること、さらに研究成果を広め、全県的規模の家庭科研究組織の改革を促し、教育実践の水準を引き上げることが重要だと考えられていた²¹。

したがって、第1期では、まず会員が、家庭科の問題状況と研究課題を把握し、第2期では、家庭科の教授・学習過程の研究に着手し、第3期では、授業の実証的研究に取り組み、第4期は主として、研究成果の検討とその交流などが行われたことは、すでに第2報および第3報で指摘したとおりである。

しかし、このような共同研究が、最初から機能したわけではない。すでに指摘したように、

「語る会」の会員は、全県的に点在していたし、勤務時間終了後に開かれる月例研究会に参加できる会員は少数であった。このような困難な研究条件のほかに、家庭科の理論仮説や、「ごはんづくり」や「せんたく」という同一教材の教材観や教授プランなどにおいても、会員の間のとらえ方や考え方には微妙な違いがみられた。「語る会」の研究会では、このような意見の相違と対立がどこから生まれてくるのか、互いに討論を重ねる一方、その授業実践の結果を持ち寄って、授業過程に即して、具体的に検討していくという方法によって取り組んでいる。このような共同研究態勢が、新しい教材づくりへの挑戦意欲になっていたし、互いの研究意欲を高めることにもなっていた。

実践者のこのような研究意欲を支えたのは、教科教育の研究は、実践者との共同研究を進めなければ、技術科および家庭科の教科理論を確立できないと考えていた村田泰彦の教科研究にたいする考え方の影響も大きい¹⁹。こうした実践者と研究者の緊密な信頼関係のなかで共同研究が可能になり、意欲的に参加した会員は、教科の理論と実践の力量を形成していくことになった。

3. むすびにかえて

1960年代から1970年代の前半にかけて、東北に生まれた一つの民間教育研究団体「岩手・技術教育を語る会」における家庭科研究の全体構造とその発展過程などについて、当時の膨大な資料の分析と、当事者からの面接聴取による方法によって考察をすすめてきた。これは、いいかえれば、家庭科教育の理論と実践の形成過程の実証的取り組みであるが、このような家庭科教育研究には、今日なお、継承すべき貴重な遺産があることを教えられた。以下、むすびにかえて指摘しておきたい

第1に、家庭科が教科として成立するためには、どのような教科理論が求められるかという点である。

学校教育は、教科教育と教科以外の教育から成り立っているが、それぞれの教科教育は、教育の全体構造のなかで、当該教科の独自性を追求することが求められる。「語る会」が、「教科の全体構造」をつねに自覚しつつ、家庭科と技術科の独自の教科理論を確立しようとした問題意識と方法論、および教科成立の根拠を示したことは、家庭科の教科理論史研究に大きな業績を残したといえる。このような教科研究の問題意識は、これから家庭科教育を構想する場合、継承したい点である。

第2に、家庭科の教材価値は、どのような教科理論に基づいて分析できるかについてである。教科理論は、教育内容や教材を確定する場合、不可欠な要素である。「語る会」が「家庭生活の何が、どのような意味で教材価値たりうるか」を厳しく検討したのは、家庭生活現象のなかにある原理や法則を、具体的な仕事を通して認識させることに、教科としての家庭科の独自性を見いだし、「生活と科学」の結合、あるいは「生活の科学的認識」の形成を重視した教科理論を確立したからである。さらにこの教科理論を、教育内容として編成するための視点を定め、それを「家庭生活における労働力の形成と再生産のしくみ」に限定し、食物、被服、住居・環境の学習、その総合的学習としての「家庭づくり」の学習と位置づけ、それぞれの教材を確定したわけである。

学習指導要領や指導書、およびそれに準拠した教科書を、金科玉条に信奉することはたやす

い。しかし、それらにみられる教材観や指導観は、学習者の生活を変革しうる知識や技能ではない。それらは現実適応的で、しかも射程の短い実用的な知識と技能の羅列であり、教育内容と教材との区別さえも不明確なことなど、多くの問題点を指摘できる。このような学習指導要領や教科書の問題性を、授業実践を通して明らかにしたのは、以上のような仮説的な教科理論を構想していたからである。

第3に、家庭科の教科理論を実証的に確立していくための方法論、いいかえれば授業研究の方法論を、どのように定めるかという点である。

「語る会」では、教科理論の確立→教育内容編成の視点→教材価値の確定→教授・学習過程の組織化→授業による実証的研究というように、いわゆる教科理論・教育内容から教材を確定し、授業を実施するという研究方法意識が濃厚である。しかし一方では、教科書教材から何を教えられるかという、いわゆる既存の教材から、その教材価値を疑い教育内容をつくりかえるという方法も採用している。前述の「ごはんづくり」や「うでカバーブル」は教科書教材ではあるが、それを「語る会」独自の教科理論から吟味し、教材の有効性を共同討議し検討したうえで、教科書とは異なる認識対象（教育内容）と教授・学習過程を組織化したものである。いずれにしても、教材価値の確定には、教科理論とそれを担う教育内容の編成が不可欠であること、また、教育内容にふさわしい教材価値が確定できなければ教授・学習過程や教授方法を仕組むことができない。

「語る会」は、教授プランの作成→プランの実践化→授業過程の復元（記録）→授業過程の分析と検討、という段階をふんで、さらに、その授業研究の結果から、プランの再構成→プランの再実践→授業過程の復元と分析、という手続きで進めている。これは、子どもの認識の変化を通して、教科理論や教育内容、および教材価値や授業展開方法の有効性を明らかにするという方法である。教師による教授過程は、子どもにとっては学習過程であり、同時に認識過程でもあるという授業研究の方法意識が明確である。それは、教授論・学習論・認識論を統一的にとらえるという方法意識もある。指導技術や指導法のみに重点がおかれる家庭科研究の方法を見直すうえで、重要な視点を提起している。

第4に、理論仮説を実際化し、実践を理論化するための共同研究と、研究会の記録はどうあればよいかという点である。

すでに考察したように、「語る会」では、まず日常の授業実践の検討から開始したが、その研究過程は、実践（検証）と理論（仮説）の相互規定的関係を確かめる研究でもあった。しかも、これらの研究過程は、技術科教員を含めた会員の共同研究として、また実践者と研究者の相互信頼関係のなかで推進された。

そして、研究会における討議内容や研究過程の充実な記録は、『会報』や別冊資料として印刷し、ひろく配布された点である。それらの記述の一部は本研究で紹介したように、研究会に参加していない会員にも、研究会の討議過程をありありと再現できるように、また討議内容や論点および課題などが理解できるように配慮して復元し記録している。

とくに、第1回（1960年12月）から第42回（1962年9月）までの研究会の記録（『会報』では1号から34号）は、研究会に参加した会員の家庭科研究にたいする主体的なかかわりや、理論と実践をつくりだす苦しい試行錯誤の過程が記録されている。これは、教育課程の自主的・創造的編成への自己変革の過程でもあり、このような集団的研究討議のなかで、共同研究の意義を自覚した会員によって、「語る会」の研究組織が支えられ、継続的に前進していたといえる。

このような研究過程の克明な記録をのこすことの意義について、村田泰彦は、地域の教育遺産となっていた生活綴方教育に学ぼうとしたこと、またそれだけではなく、教育研究活動の本来的なあり方は、研究会の参加者だけが共有するのではなく、地域の子どもや教員仲間にも還元していくことにより、それを実際に試みようとしたと回想している¹⁹。

「語る会」から学んだ以上の点については、無味乾燥の学習指導要領や、教科書に準じた教材観や学習指導法を無批判に受けいれやすい今日の家庭科教育界では、いまなお今日的な意義をもつ。5日制の完全実施に向けて、教科の再編成がもくろまれ、教育の全体構造を見通した家庭科の成立根拠を明示すべき時期に直面している現在、「語る会」の研究方法意識を継承する意義は大きい。このような成果は、また、低迷している家庭科教育の研究活動を拓くための指針となりえると同時に、21世紀へと継承していくべき研究遺産であると考えている。

* * *

「語る会」の研究成果と共同研究の試みは、後進の私には格別の刺激となり、その分析と考察には、予想をこえる時間と紙数を費やした。それは、研究会の討議過程が、その都度『会報』に克明に記録され、さらに研究成果や実践報告などの共有財産を、各種の研究集会で報告し、研究の交流がすすむにしたがって、その関係資料などの収集と整理、および分析と考察などに多くの時間を要したからである。しかし、のこされた膨大な資料を熟読することは苦痛ではなかった。むしろ、家庭科教育研究のすじみちが分かるにつれて、ノートをとることに没頭する日々もあった。

私は、いま、「語る会」の研究過程をあとづけることを通じて、教科としての家庭科を理論的に実践的に明らかにしようとした関係者の血の滲み出るような研鑽と、強靭な意志と努力に敬意を表したい。同時に、研究室や学校での机上の教育研究ではなく、研究者と実践者との共同研究を実現した労苦と、厳しい教育条件および雪ふかしい自然環境のもとで進められた研究の志をいくらかでも共有することができ、家庭科教育研究の意義を強く自覚することもできた。

生活の構造的変化が著しい今日、21世紀を生きる子どもたちに、生活者として、生き抜く力を身につけさせる家庭科教育の教科理論をどう構想するか、そのための教材開発と授業過程の研究をどうすすめるかが差し迫った課題であると、あらためて考えさせられた。

なお、今回収集した新資料、たとえば、家庭科教育実践史のうえで重要な位置を占める教材試案や実践例、また「語る会」の会員が参加した岩手県内の民間教育研究団体での実践報告一覧や、それらの研究組織との関連年表などは、一部を除いて割愛した。4回にわたった本研究を集成し、刊行する機会があれば、そのおりに掲載したいと考えている。

4報にわたった本研究を終えるにあたり、この研究に快くご協力くださり、また励ましをいただいた村田泰彦、菊池凡夫、阿部司、小笠原スモ、寺林サト子、細川ミサオ、久慈弘子、兼田美津子、阿部孝子、女鹿力、滝沢孝子、鈴木昭一、長瀬清、千葉和夫、野上麻吉、松浦郁子、佐藤まゆみ、竹花せい子の諸先生に、心から感謝申し上げます。

[付記] 本研究の大部分は、『会報』や関係資料、および面接聴取や研究会ノート、私信などに基づき、できるだけ研究活動を再現しつつ叙述したが、不注意などによる見落としや、研究活動を担った方々の実感と遊離している部分があるかもしれない、ご意見とご批判などいただければと存じます。

【 註 】

- (1) 「語る会」の会員が参加した研究組織・研究集会、およびそこで行われた基調提案、授業実践などについては、資料に基づいて整理したが、紙数の関係上、一部を巻末資料として掲載した。
- (2) 「語る会」における家庭科研究および授業実践については、部分的には以下の小論で指摘したことがあるので、本稿では、重複する点については最小限にとどめた。
 - ・「家庭科の教科理論における二つの系譜」、村田泰彦編『現代家庭科の基礎理論』1977年、法規文化出版社。
 - ・「家庭科教育理論史研究ノート—1960年前後における民間家庭科研究を中心として—1・2・3・4」大学家庭科教育研究会『年報・家庭科教育研究』第4・5・6・7号、1976・77・78・78年。
 - ・拙著『家庭科の理論と授業研究』1990年、光生館。
- (3) 技術教育を語る会の研究成果である『家庭科教育の計画と展開』(1966年、明治図書)は、分担執筆であるが、原稿のすべてについて村田泰彦が加筆修正を行い編集した(1993年3月、神奈川大学での聞き取りによる)。
- (4) 1989年版小学校学習指導要領では、環境教育の重要性を強調し、家庭科教育では、近隣の人々の生活や地域の環境にも目を向けさせたごみ処理や、騒音の防止などの必要性を指摘している(『小学校指導書・家庭編』1989年)。また、『環境教育指導資料・小学校編』(文部省、1992年)では、家庭科における実践例として、「楽しいおやつ」や「上手な洗たく」などを紹介し、環境教育の視点として、「ごみと環境汚染について関心をもち、日常生活で適切にごみの処理ができるようとする」(73ページ)、洗濯によっても「人間は環境に影響を与えながら生活していることが分かる」「洗剤の使いすぎは、川や湖の水質汚濁の原因になる」(75ページ)などをあげている。このような考え方と実践は、すでに25年前の「語る会」の住まい・環境学習の内容に含まれている。なお、具体的な実践例の紹介は割愛したが、以下のような実践例がある。
 - ・細川ミサオ「すまいのよごれーそうじ」(前掲『家庭科教育の計画と展開』)
 - ・熊谷ミヤ子「学習過程の追求ーせんたく・環境」(第16次岩教組教育研究集会リポート)
 - ・佐々木タマ「住まいと環境ー採光と照明」(『家庭科教育構想の実証的研究』、『教育』220号、1968年、国社)
- (5) 岩手県教組『岩手の教育・第15次教育研究集会報告書』1962年。また、1994年3月の研究会で、村田泰彦は当時の「語る会」の研究を回顧して、家庭科は教科理論の確立がなければ教科として存続できないこと、できるだけ実証的な授業研究をしながら教科理論をつくること、などを考えていたと報告した。大学家庭科教育研究会『会報』75号、1994年5月。
- (6) たとえば、1962年11月に刊行された国民教育研究所・岩手県共同研究者集団による『腕の中の技術と生活学力』には、岩手県北部の浄法寺町の子どもの労働実態を研究対象にした調査結果が報告されている。それによると、小学生(4~6年)では、休みはこび(田植え作業中に、間食を家から田んぼに運ぶ仕事)、苗運び、掃除、子守り、食事の世話などの仕事を(81ページ)、また、中学生では苗運び、田植え、休みはこび、苗投げ、苗とり、子守り、茶わん洗い、掃除、食事の支度などの仕事を(84ページ)に参加している。また、『アッカーヘキ地の社会と教育』(岩手県教組編、1958年)においても、1950年代後半の中学生の労働実態などが記されている(130ページ)。なお、両書とも、1992年、1991年に岩手県教育研究資料センターから、それぞれ復刊された。
- (7) 「語る会」が、家庭科の教科理論として、とりわけ「科学」を強調した根拠として、村田泰彦は以下のように証言している。
 - ・当時の学習指導要領とそれに基づく教科書が、あまりにも卑俗な実用主義の教育観に立ち、家庭内の仕事を、そのまま教材として取り込んでいたことに対する批判を込めていること。
 - ・また、教科書に載っている仕事は、子どもたちにとって、格別、学習の対象にするほどの価値はなかったこと。それは、家庭における子どもの生活体験が、現在の子どものように貧しいものでは

- なく、とくに岩手の農山村の子どもたちは、ひとりの生活者としての身辺処理技能をもっていた。したがって、生活事象に追随する教科書を学ぶだけでは、学校教育としての価値が希薄になること。
 そこで、現実の生活から一定の距離をおき、生活の「科学」を学ぶことによって、生活を見直し、それをコントロールできる力をつける必要があった。教科教育とは、そういうものだと考えていた。
 また、「科学」を学ぶ手段として、実験的方法を取りいれたが、外崎光廣氏が指摘するような「岩手には実習のない授業をしている」ということではない。
 このように考えると、子どもの生活体験が貧しくなった現在こそ、生活体験を豊かにする教育内容を構想するべきであるが、教育指導行政では、「実験」的方法や「科学」的考え方を重視している。これは、わたしたちの考えとは全く逆である(以上、1993年3月、神奈川大学での聞き取りによる)。なお、次の注(8)に紹介する各論稿においても、同様な考えが披瀝されている。
- (8) 1966年11月に提案された「家庭科教育の構想」は、岩手県教組の家庭科教育研究の理論仮説として継承されていく(岩手県教組編集・村田泰彦監修『家庭科実践記録選集』1977年、法規文化出版社)。また、そのうち「教科教育の対象としての家庭科」(大学家庭科教育研究会編『現代家庭科研究序説』1972年、明治図書)、『家庭科教育の理論』(1978年、青木書店)にも反映している。
- (9) 「語る会」の理論仮説に対する批判的見解と、それに対する「語る会」の反批判については、「技術教育と家庭科教育の研究・実践を前進させるためにーわたくしたちの研究・実践にたいする批判の論点と反批判の試みー」(『会報』36号、1962年11月)としてまとめている。この執筆者は村田泰彦である(1993年3月、神奈川大学での聞き取りによる)。なお、これは、(1)技術科教育、(2)家庭科教育、として2回にわたり『技術教育』(国土社)1962年12月号、および1963年1月号に連載された。
 また、小笠原スモは、「どの研究会の折りであったか、休憩時間に和田典子さんから、中央試案に頼らないで研究を進めてほしいと言われた」と述懐された(1994年8月、花巻市での聞き取りによる)。
- (10) 当時の学校教育における「はいまわる生活経験主義」に対する批判が込められている。
- (11) 村田泰彦によれば、「小笠原スモさんも細川ミサオさん、久慈弘子さんも、授業はいつも子どもの実態から出発していたが、岩手県でも稗貫地域と紫波地域、九戸地域とでは若干の違いがあるために研究会では毎回、子どもの意識や生活体験の相違をめぐって、授業の組み方が問題になっていた」という(1993年3月、神奈川大学における聞き取りによる)。
- (12) 小笠原スモによると、当時、家庭科教育では、社会科学的視点を重視した授業研究に取り組むべきと考えていたこと、また、今日の時点でも、家庭生活を社会科学的視点からみた教材づくりと授業研究は、もっと積極的に取り組むべきと思うと述懐された。さらに、「ごはんづくり」に関しては、糊化の原理のみを教えるのなら、ビーカーによる実験だけでよいと思うが、生活と科学を結びつけるためには、釜で炊くという「家事労働の重み」を子どもに分からせることが大事だと考えていたし、「ごはんを炊かない」家庭科や、「縫わせない」家庭科ではなかつたと回想している(1994年8月、花巻市での聞き取りによる)。
- (13) 『会報』67号(1969年3月)には、「来年度の活動方針案まとまる」という記事があるが、その内容は、会報の発行計画と月例会の日程などである。したがって、「語る会」においては、1962年4月のこの研究活動方針が、唯一と考えてよい。
- (14) 稗貫家庭科サークルは、3年間にわたるうでカバーの研究について、「何を、どうおしえるかー授業研究」(岩教組第16次教研集会報告書、執筆者は小笠原スモ)に記述している。その後、「体をおおう衣服の構造をねらってー3年間の記録」として、修正加筆したものを『自主教研発展のために・第2集・家庭科教育編ー第17次教研の内容と課題』に掲載している(66~68ページ)。ここでは、『自主教研発展のために・第2集』から、要約して引用した。
- (15) たとえば、「ごはんづくり」「衣服をとめる役目」「衣服の汚れの処理・せんたく」「住まいの汚れの処理」「お母さんの仕事」などがある。
- (16) 西内みなみ「家庭科における教育内容の自主編成プラン(1)」(『東京大学教育学部紀要』第27卷、1987年)。

(17) 当時、「語る会」の会員として活躍していた菊池凡夫、細川ミサオ（以上、1992年5月、盛岡市での聞き取りによる）、および小笠原スモ、寺林サト子（以上、1994年8月、花巻市での聞き取りによる）は、表現は異なるが、技術科および家庭科は、どのような教科か、どのように研究すべきか、研究成果を全県下の小・中学校に還元し、両教科の研究・実践の水準をあげたいと考えていた、と述べている。

また、小笠原スモは、1959年の中学校教育課程研究協議会（技術・家庭）の阻止闘争（いわゆる花巻闘争）に参加したが、当時、参加者は組合的・反行政的と思われていたので、授業のねらいや教材の教育的意義、授業過程などを詳細に書いて、同僚や指導主事などにも授業の実際を参観してもらい、批判してもらいたかった。授業で勝負するために授業研究に集中した、と述懐している（1994年8月、花巻市での聞き取りによる）。

(18) 『会報』には、随所に参考文献や図書の紹介などがある。菊池凡夫は、村田泰彦が推薦し紹介した文献や図書のほとんどを購入して、丹念になんども熟読したこと（1992年5月、盛岡市での聞き取りによる）、また小笠原スモは、村田の助言は決して結論をださないで、問題点やこれからの方針性のみの指摘であったので、研究会終了後、稗貫サークルのメンバーで、その意味について思案したり議論していたと回想している（1994年8月、花巻市での聞き取りによる）。

(19) 「語る会」がこのような膨大なエネルギーを注ぎこんだ原動力について、村田泰彦は、以下のように話している。

第1は、技術科教育や家庭科教育は、戦後の教育課程では、たびたび改訂を余儀なくされ、その変化が大きく不安定な教科であったこと。そして、それに対する担当教員の不安と憤りが大きく、見通しのきく教科理論を求める意欲が、熱心で優秀な教員にはことのほか強かったこと。

第2には、地域の教育遺産となっていた生活綴方教育に学ぼうとしていた点である。荒れ地を耕やすのような無謀と思われるような取り組みの過程で、記録を丹念にまとめ、10年にわたって発行し続けることは、生活綴方教育の方法に共通するものがあった。そしてその試みには、研究や教育の成果は、遺産として残すだけではなく、地域の子どもや教員仲間にも返していくという、研究活動のほんらい的なあり方を示そうとするものであった（1993年3月、神奈川大学での聞き取りによる）。

（1995年2月23日受理）

資料1 技術教育を語る会『会報』の主要記事一覧(No.2)

●印は研究会の報告記事、◎は家庭科関係記事、☆は作成者注記

号	発行年月	総ページ	発行者	主 要 記 事
1966年				
50	2・15	12		<ul style="list-style-type: none"> ・50号の発刊にあたって(阿部司) ・民教研北上集会のもよう—技術教育分科会— ・第9回岩手民教研集会についての感想(佐々木享) ・感想・技術科の授業展開とは?(久慈待浜中・高橋久典) <ul style="list-style-type: none"> ・感じたこと(岩手西根中・工藤哲男)・思うこと(岩大学生・菊池) ・一日目はモヤモヤした不満があったが(岩手郡松尾鉱山中・村上美代子) ●1月例会から(日教組教研の状況について、会の今後の進め方について) ・日教組15次・日高組12次全国集会(1966・1・14~17福島市)第8分科会「技術教育」の報告(下橋中・菊池凡夫) ・広告:いよいよでました!わがサークルの本『家庭科教育の計画と展開』
51	3・15	8		<ul style="list-style-type: none"> ●2月定例研究会から <ul style="list-style-type: none"> [技術](2月19日、下橋中) 1.視聴覚教材の試写会をする 2.東北技教研の提案を検討する 3.年度末人事異動と教科経営のゆがみ 4.機械学習の中で動力学をどのように教えるべきか ◎[家庭](2月19日、公民館、8名:久保田瑠子、小田レイ、伊藤玲子、阿部孝子、小笠原スモ、寺林サト子、細川ミサオ) <ul style="list-style-type: none"> 1.全国教研について(阿部孝子) 2.衣教材について ・新刊書紹介:国民のための教育の研究実践[技術編]日教組 ・高校入試はこれでよいのか ・指導要領技術、家庭改訂の動きとその資料 ・細谷俊夫(東京大学教育学部教授)「技術・家庭科誕生のころ・・・」 ・教育課程改訂のアンケート活動がもうはじまっている
52	4・15	8	添資料付	<ul style="list-style-type: none"> ●3月の定例研究会から(3月12日午後4:40、下橋中・技家準備室) <ul style="list-style-type: none"> 竹田紀男提案「新年度研究テーマ」 ・東北民教研中間研究集会(☆案内)＼第15回東北民教研開催要項(案) ・資料:岩手・技術教育を語る会『『授業の組織化』の基礎理論をどうとらえるか』(☆1964年8月に開催された第7回岩手県技術・家庭科研究大会=産業教育研究連盟との合同大会で提案したもの。『第7回岩手県技術・家庭科教育研究大会報告集』1964年8月より転載) 2 会員名簿 <ul style="list-style-type: none"> ・1966年4月現在(☆県内:男子16名、女子11名。県外:男子11名、女子8名。合計:46名)
53	5・15	8		<ul style="list-style-type: none"> ●出版記念会を催す <ul style="list-style-type: none"> ☆4月24日(日)午前10時から午後4時まで、下橋中学校) ●5月上旬の集会から(5月7日、6時20分、下橋中) ・民教研東北大会中間集会の報告(☆5月14~15日、山形市。阿部司、小田

			富司が参加)
54	6・15	10	<ul style="list-style-type: none"> ・シリンド内の圧力変化の授業（☆釜石市甲子中・高井清の授業案と板書事項） ・岩大附属中学校の学校公開から（☆5月20日開催、研究テーマ「学習指導の効率化」） ・1966年6月25～26日、盛岡市さくら会館、講座：佐々木享「熱機関の熱効率」 <p>●技術科5月下旬と6月上旬の例会から</p> <ul style="list-style-type: none"> ・5月28日（午後6時～9時30分、下橋中。参加者：小田、女鹿、平館、菊池、阿部）「内燃機関の指導計画と時間」（小田）の検討 ・6月4日（午後5時30分、下橋中。映画「金属の機械加工」（科学技術協会）＼合宿研究会の打ち合わせ） <p>◎ ●家庭科5月例会から（参加者：小笠原スモ、桐野・稗貫婦人部長、寺林サト子、伊藤貞子、小田）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・問題提起：小笠原スモ「着方に関した授業一衣の陥没地帯？」 ・授業記録：衣服のはたらきーからだを守るせんいと空気（中心的な発問を中心に） ・技術科教育研究・第1回合宿研究会案内 日時：1966年6月25日～26日正午まで会場：盛岡市さくら会館 講座：熱機関の熱効率（佐々木享） ・家庭科教育者連盟創立総会のお知らせ（1966年8月26日、東京都教育会館） ・内燃機関の熱効率の授業案（見前中・小田富司） ・第15回東北民間教育研究団体合同集会（東北民教研）によせて（☆案内） －技術教育分科会・家庭科教育分科会－ 助言者：佐々木享（教科研常任）、村田泰彦（釧路） ・阿部司「女子の技術科教育と家庭科教育」 1.女子の技術科教育 2.技術科教師からみた家庭科教育の再編成
資料		4	
55	12・15	8	<p>●技術科教育研究第1回合宿研究会の感想</p> <ul style="list-style-type: none"> ・合宿研究会よ、もう一度（北上中学校・小田島重次郎） ・技術教育を語る会に出席しての感想（川目中学校・森健朗） <p>◎ ●第15回東北民教研（山形）「家庭科部会」のまとめ（文責：千葉かきわ） ☆講師は村田泰彦、岩本正次。20数名の参加者。家庭科分科会は4回目。</p> <ul style="list-style-type: none"> 1.家庭科基調提案（小笠原スモ） 2.問題提起（小笠原スモ） <ul style="list-style-type: none"> －衣服学習の計画－布でからだをおおって保護する 3.討議 4.来年度の課題 <ul style="list-style-type: none"> ・新刊書紹介：技術教育と災害問題（原正敏・佐々木享、国土社） ・「北流」の復刊によせて－わがサークル10年のあゆみ－ ☆岩手民教研と岩手県教組教文部との共同責任で復刊したもの はじめに 1.技術科教育と家庭科教育研究の思想的背景（以下、次号） ・いいわけ（阿部司）
1967年			
56	1・15	8	<ul style="list-style-type: none"> ・古典的な校長の教育観—明治39年と昭和42年と—（村田泰彦）

				<ul style="list-style-type: none"> ・第10回民教研・一関集会の報告 技術と教育分科会・その1：参加者17名（文責・及川怜）
			◎	<ul style="list-style-type: none"> ・民研山の目集会・家庭科教育：参加者22名（文責・小笠原スモ） ・日教組第16次・日高教第13次教研大会に出席して（見前中・小田富司）
			◎	<ul style="list-style-type: none"> ●家庭科今年度の研究構想 <ul style="list-style-type: none"> 1.主にどんなことを勉強していくか 2.年間スケジュール <p>☆研究部長：小学校は細川ミサオ、中学校は阿部孝子</p>
資料	2	会員名簿		<ul style="list-style-type: none"> ・1967年2月15日現在
	4			<ul style="list-style-type: none"> ●1967年度の研究をどうすすめるか（1967年2月23日付） <ul style="list-style-type: none"> —今後の研究活動の基本方針— 1.技術科研究会のもち方について 2.技術科今年度（前期）の研究構想 ☆3月から8月までの研究計画
	57	3・15	6	<p>案 内</p> <ul style="list-style-type: none"> ●技術科教育研究・第2回合宿研究会案内（2月11～12日、下橋中学校） <ul style="list-style-type: none"> —「技術科の授業をよくするために必要な教師の基礎教養」の学習会— ・意識的誤訳(1)－ことは語学だけの問題ではない（村田泰彦） ●3月定例研究会（第1回） <ul style="list-style-type: none"> ☆3月10日6時30分より、下橋中学校。参加者：阿部司、菊池凡夫、及川怜 1.もちよった年間教授計画案 <ul style="list-style-type: none"> ・岩手郡巻堀中学校（及川）の男子技術科年間教授計画案 ・盛岡市下橋中学校（阿部・菊池）の男子と女子の技術科年間教授計画案 2.話しあわせたことがら ・家庭の再評価－家庭原理論への招待（村田泰彦） ・意識的誤訳(2)－それは教育の荒廃をもたらす（村田泰彦）
	58	5・15	8	<ul style="list-style-type: none"> ●4定例研究会（家庭科第1日目）☆参加者：6名、文責:小笠原スモ <p>今年度の研究方向</p> <ul style="list-style-type: none"> 1.環境づくりと花巻の問題 2.地域のなかから生きた教材を ・山陰だより（村田泰彦） ・家庭科教師から－特殊学級担任教師になって三年目の感想（久慈弘子） ・論文紹介:和田典子「家庭科の学力とは何か」（『教育』1967年6月号、No209） <ul style="list-style-type: none"> ●日教組第16次全国教研（家庭科部会）から学ぶ（細川ミサオ） <ul style="list-style-type: none"> －大分県の「だんご汁」の授業（中学1年）の実践から－ ☆板井セツ子「だんご汁の授業」から転載
	59	6・15	8	<ul style="list-style-type: none"> ・栽培学習をどう進めているか(その1)（城西中・女鹿力） <ul style="list-style-type: none"> －教育価値がどこにあるかを吟味しよう－ ●技術4・5・6月の定例研究会から <ul style="list-style-type: none"> ・4月15日（第2回）、5月13日（第3回）、5月27日（第4回）、6月10日（第5回）、6月24日（第6回）の概要報告 ・「機械1」の授業をどうすすめるか－6月10日の研究会例会のまとめ（まとめ：及川怜） ●高校家庭科の技術検定が岩手県下でも強引に実施されています（阿部司） ・新刊紹介：岩手大学教育学部附属中学校著『効率的学習指導の構造』明治図書 ●「家庭科の学力とはなにか」を読んで（阿部孝子） <ul style="list-style-type: none"> －『教育』誌 和田典子論文－

			◎	・『家庭科教育の計画と展開』の増刷案内 ・研究の自由を求めて—第16回東北民教研に参加しよう —「技術と教育」「家庭科と教育」分科会のもち方— ・人権の実現過程—それは、教育のしごとである（村田泰彦） ・浅虫集会における問題提起—技術と教育— ・栽培学習をどうすすめているか・その2（城西中・女鹿力） ・湯わかし器の効率測定の授業（岩手大学附属中学校・竹田紀男） ・切削量と仕事の量（下橋中・菊池凡夫） ・中学校技術科・木工の事故統発問題を衆院文教委でとりあげられる ・早急に安全対策講ずる—中学の木工実習事故で文相答弁 （岩手日報、7月20日付朝刊より転載） ・男女差別の温床—新聞でもたたかわれる技術・家庭科 (朝日新聞「教室は考える」より転載) ●技術科後期の研究構想 ☆7月22日に会合。小田、女鹿、及川、竹田、菊池、阿部の6名。7月から翌年2月までの研究計画を立案 ・釧路からもはるばる2名の先生が参加 ☆浅虫集会家庭科分科会への参加予定の連絡 ・東北技教協の研究成果をこの秋にまとめる予定です
60	7・15	12	◎	・家庭科の教育研究活動をめぐって（村田泰彦） —研究と運動の意味をたしかめよう— ●東北民教研浅虫集会・家庭科分科会の報告（村田泰彦） —人間解放における家庭科教育の役割を求めて— ●村田泰彦「人間解放における家庭科教育の役割」 ・浅虫の東北民教研に参加して（零石小・主浜アイ） ●村田泰彦「自主教研における家庭科研究の課題」 ・浅虫民間教育研究に参加して（久慈湊小・松本イト）
61	8・15	14	◎	●小学校教育課程改訂の問題点—小学校家庭に関連して（村田泰彦） はじめに 1.基本構想の問題点 2.家庭科の問題点 ●機械学習の授業をめぐって—9月9日の例会から（提案者：及川怜） 1.提案の概要 2.提案をめぐっての討論 3.機械学習の構想 ・第20次岩教組教研に参加して（城西中・女鹿力） ●10・11・12月の定例研究会 10月14日—及川怜宅：阿部司・岩手大学内地留学の学習状況の報告 11月11日—組合休憩室：佐々木享氏を囲んで 11月25日一日教組教研全国大会に発表する女鹿さんのレポートつくりと冬の県民教研の打ち合わせ(及川、女鹿、阿部の3名。菊池凡夫—低血圧で入院、小田富司—胃病で通院) ・「生産労働と教育」についての論稿（阿部司） ・「生産労働と教育」高橋金三郎（『現代教育科学』1967年7月号より転載） ・会員からの便り 久慈弘子、松本イト（久慈湊小）、えびなすすむ、鈴木千賀子（長島中）
62	9・15	6	◎	
63	12・15	6	◎	
1968年				
64	1・15	12	女鹿力 (城西中)	・第11回民研福岡集会の記録 技術と教育分科会・その1（文責：及川怜） 家庭と教育の分科会(1)—基調報告、問題提起と討議など

			家庭と教育の分科会(2)ー授業と集団(家庭科) ー徳田小学校・細川ミサオさんの提案をめぐってー
65	7・15	14	<ul style="list-style-type: none"> ●「技術教育を語る会」新組織成る <ul style="list-style-type: none"> ・[技術]の代表者: 女鹿力(盛岡市城西中)＼事務局: 阿部司(下橋中) ・[家庭]の代表者: 千葉かきわ(東磐井郡藤沢中)＼事務局: 小笠原スモ(前田小) ●技術教育を語る会・第3回合宿研究会のおしらせ <p>☆本号より「語る会」の代表は盛岡市城西中の女鹿力となる。毎月1回15日発行と記載しているが、次号は6か月後の7月に発行。</p> ●5・6・7月の定例研究会 <p>☆例会の案内と前回の話し合いの内容をはがきで投函することになった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・5月下旬(25日3時30分、下橋中)の例会案内、および5月11日の例会報告(参加者: 東正彦、及川、吉田、菊池、阿部、女鹿) ・6月上旬(8日3時30分、下橋中)の例会案内、および5月25日の例会報告(参加者: 菊池・附属中、小林・岩大在籍、阿部、菊池、女鹿、東、及川の7名)ー提案: 金属加工の研究はここまでできている(阿部司) ・6月下旬(22日3時30分、下橋中)の例会案内、および6月8日の例会報告(参加者: 女鹿、東、小林、小田、千葉・厨川中、長瀬・岩大生、及川・厨川中、阿部司、菊池凡夫の9名)ー提案: 内燃機関の授業(東正彦)、夏の東北民教研(秋田・大館)中間集会の報告(阿部、女鹿) ・7月上旬(6日3時30分、下橋中)の例会案内、および6月22日の例会報告(参加者: 阿部、菊池、女鹿、東、及川、長瀬、小林、竹田の8名) <p>提案: 栽培学習をこのようにすすめている(女鹿力)</p> <p>单一機械の学習と技術史的とり扱い(及川怜)</p> <p>技術史を中心とした技術教育の内容(長瀬清・岩大生)</p> ・7月下旬(20日4時、下橋中)の例会案内、および7月6日の例会報告(参加者: 阿部、及川、女鹿、東、菊池凡夫の5名) <p>提案: 映画「種をまく人々—ヤロビ農法」を上映して(及川怜)</p> <p>熱機関の技術史について(東正彦・城西中)</p> ・民教研福岡集会記録・その2ー「授業の吟味」を中心にー(文責: 及川怜) <p>1.はじめに 2.栽培学習をめぐって 3.電気分野をめぐって</p> <p>4.機械分野の提案をめぐって 5.阿部さんの加工分野の提案から学んだこと</p> ◎・県民研・家庭科部会に参加しての質疑・意見(久慈弘子さんから細川ミサオさんへ)(阿部司) ◎・細川さんにきく(久慈弘子) <p>ー授業と集団(家庭科)について〔民研報告Ⅱをめぐって〕ー</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日教組17次・日高教第14次教育研究全国集会に参加して(城西中・女鹿力) <p>ー「栽培学習をどう進めたらよいか—エネルギー変換を視点としてー</p> ・新指導要領案と技術・家庭(阿部司) <p>・第21次教研の動き ☆県教研は、11月30日から3日間・水沢中学校で開催</p> <p>1.はじめに 2.三日間の中でみんなの実践をほんものにしよう</p> <p>3.どんなこどもを育てるのか 4.たくましく生き抜いていく力を一教える内容となるもの 5.多様な授業の手立てをー授業の展開</p> <p>6.僻地の子どもにも教育の機会均等をー教科をとりまく諸条件</p>
66	12・15	14	

			7.さいごに（文責：及川怜）
			・村田先生からのお便り（1968年11月26日付）
◎			・家庭科における教育思想（村田泰彦） ☆『家庭科教育』（家政教育社）1968年9月号から転載
◎			・家庭科教育の状況判断－家庭科教育論再検討の試み（村田泰彦） ・岩大技術科ゼミナールの歴史と展望（4年次・長瀬清）
資料	28		・日教組第18次・日高教第15次教育研究全国集会報告書 ☆技術科教育および家庭科教育分科会提出レポート ・「機械学習」の授業実践 岩手県教職員組合 高橋シズ（盛岡市大宮中学校） 東 正彦（盛岡市城西中学校）
資料	14		・私たちの研究の姿勢と実践－保育学習を中心として－ 岩手県教職員組合 本田方子・小笠原春子（盛岡市厨川中学校）
資料	12		・生活を正しくとらえさせるために－環境づくりへのとりくみ－ 岩手県教職員組合 長谷川弘子（紫波郡徳田小学校）
1969年			
67	3・15	9	菊池凡夫 (下橋中)
			●交流ノート ・「技術教育を語る会」の活動発展のための提言 －家庭科研究の立場から－久慈小・久慈弘子、岩大附属中・滝沢孝子 ・日教組教研（熊本集会）技術教育分科会に参加して（盛岡市大宮中・高橋 シズ） ・第12回民研古集会記録（文責：及川怜） －授業の吟味を中心に－若い会員多数の中で開く 1.基本講座（佐々木享・専修大学） 2.問題提起と討論の概要
			活動方針
			・来年度の活動方針案まとまる（☆7～9頁は手書き） 1.会報発刊について 2.月例研究会について
68	6・15	6	会員名簿
			・1969年3月15日現在 ☆本号より代表者は菊池凡夫（下橋中）となる
			●今年度の年間教授計画の検討 その1・技術科－4月12日の研究会（記録：及川） 1.年間教授計画の提案（厨川中と下橋中） 2.提案をめぐる話し合い (1)女子の技術教育について (2)二、三の単元をめぐって その2・家庭科－5月7日の研究会（文責：滝沢孝子） ・年間教授計画の提案（厨川中・小笠原春子と附属中・滝沢孝子）
			●交流ノート・その2 矢沢小・小笠原スモ、笛間第二小・寺林サト子、一関中・千葉かきわ ・会員の近況（久慈弘子－九戸郡野田村玉川小へ、高井清一釜石市小佐野中 へ異動）
69	12・15	8	菊池凡夫
			・第13回岩手民教研盛岡（城西中）集会（1月6～8日）に集まろう ☆「技術と教育」「家庭科と教育」分科会の案内 ・新指導要領をこうみる 栽培（女鹿力）＼製図（及川怜）＼金属加工（菊池凡夫） ●交流ノート－久慈弘子、村田泰彦「教育研究の再出発」 ・岩手高教組教研（第17次、12月11～12日）に参加して（阿部司）

1970年			
70	1・15	7	<ul style="list-style-type: none"> ・共学による「食物」の授業の組織化－岩手民研の研究報告より －共学による「食物2」の実践（厨川中技家研究部）－ <ul style="list-style-type: none"> 1.男女同一内容の教授をすすめる立場 2.共学による「食物2」の学習を試みた実践 <ul style="list-style-type: none"> 1)食物学習をどうとらえたか 2)授業の展開と記録 3)授業の分析と課題
71	12・15	4	<ul style="list-style-type: none"> ・第14回岩手民教研（東水沢中、1971年1月7～9日）の集会のお知らせ ・民教研で語ろう（菊池凡夫） ・第13回民教研（盛岡集会）技術と教育分科会記録 <ul style="list-style-type: none"> －指摘されたいくつかの課題－（文責：及川怜） 1.基調報告をめぐって 2.実践検討の中から
1971年			
72	1月	2	<ul style="list-style-type: none"> 千葉啓一 (厨川中) ・第23次岩教組教研、生産技術部会に参加して（大原中・長瀬清） ・岩教組が技術科における安全確保と災害保障について県教委に要求書をだす <p>☆本号より事務局は、盛岡市立厨川中学校・千葉啓一となる</p>
資料		9	<ul style="list-style-type: none"> ・添付資料：岩手県教組「中学校技術・家庭科教育における安全確保と災害保障に関する要求書」
73	2月	14	<ul style="list-style-type: none"> ・第14回岩手県民教研 その1・「技術と教育」分科会記録（文責：及川怜） <ul style="list-style-type: none"> 1.基調報告をめぐる話し合い 2.授業の吟味 ・第20次全国教研に参加して（大原中・長瀬清） ●例会のようす <ul style="list-style-type: none"> ・第1回例会（1月23日、下橋中）文責：及川 <ul style="list-style-type: none"> 参加者：阿部、菊池、及川、千葉啓一、小笠原春子、長瀬清 ・原正敏氏（北大）を囲む会（2月28日） <ul style="list-style-type: none"> 参加者：阿部、菊池、女鹿、千葉啓一、及川、菅原金治郎（岩大） ・第2回例会（2月12日、下橋中）文責：東正彦 <ul style="list-style-type: none"> 参加者：阿部、菊池、内形せい子、小田、東、及川 ・例会案内（2月27日、下橋中）－教科書（白表紙）の検討 ・事務局便り（千葉啓一）＼会費納入についてのお願い
		会員名簿	
74	7月	6	<ul style="list-style-type: none"> ・第20回東北民教研花巻集会のお知らせ <ul style="list-style-type: none"> 「技術と教育分科会」は技教研・第4回全国大会と合同 「家庭と教育分科会」の研究協力者は村田泰彦（神奈川大学） ・技術教育研究会（東京集会）に参加して（長瀬清、及川怜） ・技術科にかかる教育課程批判－生産技術教育の視点から（及川怜） <ul style="list-style-type: none"> 1.はじめに 2.経験主義、作業中心主義の性格残存 3.分野毎の問題点のいくつか ・事務局便り－東北民教研第20回記念集会近づく ○ ●仮称『家庭科教育』の執筆作業始まる <ul style="list-style-type: none"> 第1回原稿検討会（7月25日、花巻市碑貫教育会館） <ul style="list-style-type: none"> 参加者：小笠原スモ、千葉かきわ、近江サチ、西郷哲子、小笠原春子、滝沢孝子、及川怜

				第2回検討会の予定（8月9日）☆この検討会は実施されなかった模様 第3回検討会予定（9月4～5日）☆この検討会が第2回となる
75	10月	6		<ul style="list-style-type: none"> ◎・『家庭科教育の創造』の発刊をめざして ◎・家庭科学習内容試案について（村田泰彦）☆9月検討会での論稿 ◎・「家庭一般」を構想するにあたって（神奈川大学・村田泰彦） ・第20回東北民研（花巻集会）記録より抜粋 ◎ <ul style="list-style-type: none"> 1.「国民のための家庭科教育の創造」の今日的意義（村田泰彦） 2.「東北民研運動の歩みと今後の課題」（専修大学・佐々木享） ◎・東北民教研に出席して（一関南小・千葉かきわ）
76	12月	4		<ul style="list-style-type: none"> ・第15回岩手民教研（東山中）集会のお知らせ—1972年1月7～9日 テーマ：授業の吟味 ・中教審答申をどう読みとるか（菊池凡夫） ・岩教組第24次教研、技術教育分科会記録 第1の柱 自主編成の視点を中心（文責：及川怜） ◎・家庭科学習内容試案について—75号につづいて
1972年		B4	総会報告	<ul style="list-style-type: none"> ●昭和47年度総会報告書 ☆総会は1月8日に開催。手書き謄写印刷 1.事務局報告 2.昭和47年度活動方針並びに具体的活動 3.組織代表：菊池凡夫、千葉かきわ 事務局：千葉啓一、滝沢孝子 研究部：長瀬清 会計：及川怜
77	2月	4		<ul style="list-style-type: none"> ●技術教育合宿研究会ご案内（2月19～20日、盛岡市繫温泉） ・岩手冬の民研（松川集会）記録（文責：及川怜） <ul style="list-style-type: none"> 1.はじめに 2.「技術と教育」分科会—基調報告をめぐって 3.授業の吟味 ・私の読んだ本 その1（長瀬清） ・事務局便り
78	6月	6	厨川中	<ul style="list-style-type: none"> ・第21回東北民研合同研究集会案内—集会要綱 ・東北民教研中間集会（山形県東根温泉）に参加して（及川怜） ・私の読んだ本 その2（長瀬清）—岩本正次著『生活科学入門』 ・事務局便り ・「語る会」の活動を盛り上げるために支局制を実施 —宮古、東磐・気仙、胆江・西磐、下北、釜石、花巻、九戸の7支局 ・例会案内（7月19日、7月28日） <p>☆本号より代表者名は無記名。事務局は厨川中学校内となり振替口座開設。</p>
79	12月	6		<ul style="list-style-type: none"> ・第16回岩手民教研北上集会のお知らせ（1972年1月7～9日、北上市黒沢尻東小学校 テーマ：今こそ教育を国民の手に—中教審答申と私たちの目ざす教育 ・北上集会を成功させよう（会代表・菊池凡夫） ・岩教組25次教研の分科会記録 家庭科教育分科会（文責：小笠原春子）—食・衣・電気機械・組織づくり 技術教育分科会（文責：長瀬清）
1973年		80	欠号	

81	2月	6	<ul style="list-style-type: none"> ・第16回岩手民研・北上集会記録 技術と教育分科会（文責：及川怜） 家庭科と教育分科会（文責：千葉かきわ、出席者：小7名、中7名、高1名） <ul style="list-style-type: none"> ・基調報告「授業の組織化」（小笠原スモ） ・男女の能力差について（村田泰彦） ・家庭科とは（小笠原春子） ・討議：食・衣・保育・電気・組織づくり ●例会（3月3日、下橋中、全国教研報告会）、合宿研（4月14～15日、和賀町岩崎温泉、家庭科教育・技術科教育の研究状況と男女共学の問題について）の案内 ・事務局便り（昭和48年度サークル人事一全員留任）
----	----	---	--

注1) 確認できた『会報』は以上のとおりである。本研究の研究対象とする「技術教育を語る会」は、「会報」81号をもって自然消滅したと考えてよい。第1号から49号までの一覧は、第1報（本紀要・75号）に掲載した。

2) なお、1976年6月に「技術教育を語る会」（代表・中川淳）が新たに組織され、同じく『会報』を発行しているが、本研究では、1960年代を対象としたため触れないことにする。

資料2 岩手県内の家庭科研究組織関連略年表

凡例 1) ◆は研究活動
 2) [] は研究会開催地
 3) ☆は出典

岩手県技術・家庭科研究会（職家研のち技家研）	岩手県教員組合（岩教組）教研集会家庭科教育分科会
1950年 8月30日 ◆岩手県職業・家庭科研究会発足（以下、職家研と略記） この間の研究活動は省略	1948年11月26～27日 ◆第1次岩教組教育研究集会〔盛岡市〕 この間の研究集会は省略
1959年 6月18～20日 ◆文部省主催中学校教育課程（技術・家庭）東北・北海道地区研究協議会開催（花巻温泉）	1959年 6月18～20日 ◆文部省主催の左記協議会の阻止闘争（花巻闘争） 1959年11月13～15日 ◆第12次教育研究集会〔一関市〕 ・助言者：上野俊子（一関修紅短期大学） ・討議の柱 1)改訂指導要領の批判的検討とその方策 2)指導計画作成と学習指導上の問題点
1960年 9月5～6日〔繫温泉〕 ◆第1回技術科教育研究協議会 (県職家研と岩手県教組との共催。第5回まで継続) ・テーマ：中学校技術教育はどうあるべきか ・参加者81名、講師13名 ・問題提起 1)研究推進のどこに問題があるか（村田泰彦・教育研 究所） 2)技術・家庭科のうけとめ方とそのありかた（えびな すすむ、駒林邦男） 3)男女二系列と選択教科がうむ教育的弊害（討議） ☆岩手県教員組合、岩手県職業・家庭科研究連絡協議会 『中学校の技術教育はどうあるべきか－第1回合宿研究会の記録』1960年10月	1960年11月3～5日 ◆第13次教育研究集会〔北上市〕 ・家庭科分科会は小・中の合同 ・助言者：村田泰彦（教育研究所）、小田切敏（岩手大学） ・討議の柱 1)教育課程の中で、家庭科のもつ役割は何か 2)その役割を果たすために内容はいかにあるべきか 3)教科書研究（教材研究・教材の系列） 4)研究のつながりと積み上げについて ・成果と課題 1)教材の教育的意味づけを実践の中から考える－主体 的に家事労働に取り組むような実践 2)生活単元か、教材単元かの実証的研究
1961年 1月13～14日〔新鶴温泉〕 ◆第2回技術教育研究協議会（共催） ・テーマ：技術教育・家庭科教育のねらいと教育的意味 づけの吟味 ・参加者80名、講師6名 ・討議内容（家庭科関係） 1)生産技術と家事労働の技術の違い 2)生産労働と家事労働の関連 3)家庭科のとらえ方 ☆岩手県教員組合、岩手県職業・家庭科研究連絡協議会 『第2回技術教育研究協議会の記録』	1961年11月11～13日 ◆第14次教育研究集会〔釜石市〕 ・家庭科分科会は各支部から小・中のリポート提出（第 29次まで継続。ただし、合同討議を設定する） ・助言者：村田泰彦（教育研究所）、千田カツ（常盤中） ・討議の柱 1)家庭科教育のねらいを再検討する 2)教材の教育的意味づけ（昨年の課題） 3)家事労働と労働力の再生産について ・成果と課題 1)家庭科の考え方（4類型） ・家庭生活の民主化と合理化 ・労働の再生産のための科学的法則の認識 ・上記の二つを重視する ・家庭生活に必要な技能・技術を重視する 2)家庭科教育内容を構想する視点 ・労働力再生産に含まれる生活の矛盾をとらえる ・家族関係の民主化 ・生活管理 3)内容とねらいを一致させた実践－教授過程や実践記 録を明らかにする
1961年 5月26～27日〔繫温泉〕 ◆第3回技術教育研究協議会（共催） ・テーマ：研究体制づくりの確立と授業研究のすすめ方 ・参加者約100名 ・第4分科会「調理・被服」および第5分科会「家庭工 作・家庭機械」を新設 ☆岩手県教員組合、岩手県職業・家庭科研究会『第3回 岩手県技術教育研究協議会の記録』	

<p>1962年2月16～17日 [蕨美溪]</p> <p>◆第4回技術教育研究協議会（共催）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・テーマ：教授・学習過程の研究 ・参加者128名、講師7名の合計135名 ・シンポジウム：教科論と教材論をめぐって（久慈弘子・バネラーとして参加） ・討議内容 <ul style="list-style-type: none"> 1) 技術・家庭科の本質をどうとらえたらよいか 2) 教材選定の視点 3) 教材の現代化と教科構造の再検討 <p>☆岩手県教員組合、岩手県職業・家庭科研究会『第4回岩手県技術教育研究協議会の記録』</p>	<p>1962年11月17～19日</p> <p>◆第15次教育研究集会 [盛岡市]</p> <p>小学校分科会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・助言者：村田泰彦（教育研究所）、阿部キミ（岩手大）、小笠原スモ（前田小） ・討議の柱 <ul style="list-style-type: none"> 1) 家庭科をどう考えるか—家庭科の成立根拠について 2) 教授=学習過程について—仮説を立てて目的・方法を明確にする\科学の基本を重視する。 ・今後の研究課題—科学的な知識の体系を明らかにした実践（理論と実践の結びつき） <p>中学校分科会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・助言者：鷹嘴テル（岩手大学）、千田カツ（常盤中） ・討議の柱 <ul style="list-style-type: none"> 1) 中学校の家庭科はどうあるべきか 2) 教材選定の視点と学習指導について 3) サークル活動の研究のすすめ方
<p>1962年9月21～22日 [金田一温泉]</p> <p>◆第5回技術教育研究協議会（共催）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・テーマ：技術教育・家庭科教育の実践的研究をめぐる諸問題 ・参加者約130名 ・第1回から第4回までの経過報告と研究協議会の成果（阿部司事務局長） ・「語る会」の「技術教育研究=実践の基本問題」および「技術・家庭科の授業研究のすすめ方」について（盛岡市立下橋中・菊池凡夫） ・討議内容 <ul style="list-style-type: none"> 1) 教科のうけとめ方と授業研究のすすめ方 2) 教科の運営と教師の研修について <p>☆岩手県教員組合、岩手県技術・家庭科研究会『第5回岩手県技術教育研究協議会の記録』</p>	<p>1963年10月10日 [盛岡市立下橋中学校]</p> <p>◆第6回岩手県技術・家庭科教育研究大会と改称（県技家研の独自開催）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・テーマ：技術・家庭科で何をどう教えるか ・下橋中の公開授業（木材加工・金属加工・電気・被服） ・『技術・家庭科の研究と実践—3年間の歩み』（下橋中学校紀要、1）を配布 <p>☆岩手県技術・家庭科研究会『第6回岩手県技術・家庭科教育研究協議会の記録』</p>
<p>1963年11月2～4日 [水沢市]</p> <p>◆第16次教育研究集会 [水沢市]</p> <p>小学校部会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・講師：村田泰彦、助言者：寺林サト（江釣子第二小） ・討議の柱 <ul style="list-style-type: none"> 1) 家庭科ではどんなねらいで、何を、どのように学習させることなのか（科学と生活の結びつき） 2) 家庭生活の何が教科内容になるのか 3) 家庭科研究推進のためのサークル活動のあり方 <p>中学校部会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・助言者：清水房（岩手大学）、千田カツ（常盤中） ・討議の柱 <ul style="list-style-type: none"> 1) 家事労働の価値を子どもはどううけとめたか 2) 科学と生活の結合を重視した実践 	<p>1963年11月2～4日</p> <p>◆第16次教育研究集会 [水沢市]</p> <p>小学校部会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・講師：村田泰彦、助言者：寺林サト（江釣子第二小） ・討議の柱 <ul style="list-style-type: none"> 1) 家庭科ではどんなねらいで、何を、どのように学習させることなのか（科学と生活の結びつき） 2) 家庭生活の何が教科内容になるのか 3) 家庭科研究推進のためのサークル活動のあり方 <p>中学校部会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・助言者：清水房（岩手大学）、千田カツ（常盤中） ・討議の柱 <ul style="list-style-type: none"> 1) 被服製作の基礎技術 2) 女子の技術教育
<p>1964年8月2～4日 [花巻温泉]</p> <p>◆第7回技術・家庭科教育研究大会（第13次産業教育研究連盟全国大会との合同）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・テーマ：授業をどう組織するか ・「授業の組織化」の基礎理論をどうとらえるか（技術教育を語る会） 	<p>1964年11月6～8日</p> <p>◆第17次教育研究集会 [二戸市]</p> <p>小学校部会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・助言者：細川ミサオ（紫波・徳田小） ・討議の柱 <ul style="list-style-type: none"> 1) 家事労働への取り組み

<ul style="list-style-type: none"> ・基調提案：阿部司（下橋中），小笠原スモ（前田小） ・授業研究の実践報告 <p>☆岩手県技術・家庭科教育研究会『第7回岩手県技術家庭科教育研究大会研究記録』『第7回岩手県技術家庭科教育研究大会研究報告集』</p>	<ul style="list-style-type: none"> 2)科学と生活との結びつき 3)家事労働についての社会認識 ・今後の課題 1)生活の歪みをみぬく授業実践 2)「家庭づくり」について <p>中学校部会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・講師：村田泰彦（釧路女子短大），助言者：佐藤哲子（上田中） ・討議の柱 1)教材のねらいと授業への取り組み 2)家庭生活の合理化と家庭づくり
<p>1965年11月6～8日</p> <p>◆第18次教育研究集会〔釜石市〕小・中合同分科会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・講師：村田泰彦（釧路女子短大），助言者：千田カツ（常盤中），小笠原スモ（前田小） ・討議の柱 1)被服領域における生活と科学 2)食物領域における生活と科学 3)家庭領域における生活と科学 ・家庭科教育の構想を提案 ・今後の課題 1)小・中の一貫したカリキュラムをつくる 2)子どもの意欲を育てる実践 	<p>1965年11月6～8日</p> <p>◆第18次教育研究集会〔釜石市〕小・中合同分科会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・講師：村田泰彦（釧路女子短大），助言者：千田カツ（常盤中），小笠原スモ（前田小） ・討議の柱 1)被服領域における生活と科学 2)食物領域における生活と科学 3)家庭領域における生活と科学 ・家庭科教育の構想を提案 ・今後の課題 1)小・中の一貫したカリキュラムをつくる 2)子どもの意欲を育てる実践
<p>1966年1月25～26日〔一関市〕</p> <p>◆第8回岩手県技術・家庭科教育研究大会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・テーマ：中学校技術・家庭科における授業の効果をあげるためにどうしたらよいか <p>☆『第8回岩手県技術・家庭科教育研究大会要項』</p> <p>1966年10月6～7日〔北上市〕</p> <p>◆第6回東北地区・第9回岩手県技術・家庭科教育研究大会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・テーマ：中学校技術・家庭科の授業を効果的に進めるためにはどうしたらよいか 	<p>1966年11月4～6日</p> <p>◆第19次教育研究集会〔江刺市〕</p> <ul style="list-style-type: none"> ・講師：村田泰彦（釧路市教育委員） ・討議の柱 1)地域の生活と子どもの要求をどのように組織したか 2)小・中を一貫する家庭科の構想と実践にどう取り組んだか 3)研究活動をどうすすめたか ・今後の課題 1)住環境づくりの実践をふかめる 2)地域の実態と子どもの要求にもとづく実践 3)生活を変革する芽をそだてる実践

- 注 1) 技家研についての出典は、そのつど記載した。また、以下の資料を参考にした。
- ・岩手県技術・家庭科教育研究会『三十五年の歩み』(1986年3月)
 - ・職家研『会報』7号(1961年3月)，および技家研『会報』9号(1963年8月)など。
- 2) 岩教組教育研究集会については、岩手県教員組合『岩手の教育』各年次の教育研究集会報告書より作成した。また、以下の資料を参考にした。
- ・岩教組編『岩手県教組20年史』1977年
 - ・岩手県教組『自主教研発展のために－第16次教研の内容と課題』1963年3月
 - ・同 上 『自主教研発展のために・第2集－第17次教研の内容と課題・家庭科教育編』1964年3月
 - ・同 上 『自主教研発展のために・第3集－第18次教研の内容と課題』1965年3月